
古代アメリカ学会会報

第46号



図版 パーツを組み合わせた変造品 [東海大学文明研究所蔵 資料番号：11571-390]

写真：水鳥飾把手付壺（ピクス文化） X線CT画像（右4枚）：異なるグレー階調で補修痕が映る ©東海大学文明研究所・吉田晃章

目次

◆会長あいさつ		◆自著紹介	
	1		37
◆第13期新役員の紹介		◆研究懇談会の報告	
	2		44
◆学会からのお知らせー古代アメリカ学会主催 第3回公開シンポジウムの開催についてー	2	◆本学会協力・後援事業の報告	45
◆特集：ウィズ・コロナ時代の研究活動		◆事務局からのお知らせ	46
	3		46
◆会員からの寄稿		◆編集後記	50
	30		50

2021年7月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます

会報第 46 号の発行に寄せて

井口 欣也（古代アメリカ学会第 13 期会長）

第 12 期に引き続き、第 13 期会長を務めさせていただくことになりました。代表幹事の井上幸孝さんをはじめ、各会務担当役員のみなさんとともに学会の発展のために取り組んで参ります。どうぞよろしくお願いたします。



世界的にワクチン接種が進行しているとはいえ、新型コロナウイルス感染拡大の影響はいまだ大きく、おそらく多くの会員の皆さんにとって、今年も現地調査は難しい状況にあることと思います。また、勤務先での業務や、学生会員の方にとっては在学先での学修においてご苦労が絶えないことでしょう。

一方で、学術の世界では研究の歩みを止めないための模索と実践が始まっています。その動きは本学会員の皆様においても例外ではなく、むしろたいへん積極的なものがあると感じております。今号では、会報編集委員会（千葉裕太委員、五木田まきは委員）の企画により実施された、コロナ禍における研究活動に関するアンケートの報告が掲載されています。さらに、7 名の方からは、現地・国内での研究活動や普及活動、現地博物館の取り組みなどについて具体的な報告をお寄せいただきました。常に前を向き、むしろこの状況を活かした新しい方法を取り入れ研究にとりくむ会員のみなさんのたくましさや情熱が伝わってきます。昨年の会報特集記事とともに、今号も、学会の大変貴重な記録となりました。

次世代の育成と成果の社会還元は学会として取り組むべき重要課題のひとつですが、今号では、他学会の中高校生向け普及活動の事例、そして 2022 年度から始まる「歴史総合」の教科書についての報告も寄せられています。本学会では、昨年度、科研費（研究成果公開発表 B）を獲得し、2 回の学術講演会を企画しておりま

したが、昨年は感染拡大の影響で開催できませんでした。補助金の繰越手続きを経て、あらためて今年度の実施を目指しているところです。

また、このような状況にあっても会員の出版活動はたいへん活発です。今号では 4 名の方から、著者／编者ご自身による出版物の紹介原稿をお寄せいただきました。

さて、第 12 期会長就任時のご挨拶（2019 年会報 44 号）でも申し上げましたように、關雄二前会長が掲げられた 3 つの目標、すなわち研究水準の強化、国際化、研究成果の社会還元と普及・次世代の育成という目標を、学会の基本的、長期的な目標として位置づけることには変わりありません。

その一方で、昨年来の予期せぬ新型コロナウイルス感染拡大により、学会運営においてもさまざまな対応を迫られることになりました。事務局では、感染拡大防止のため、会員のみなさまへの発送業務をなるべくメール発送する方針へと切り替えています。これにつきましては、会員の皆様にもご理解をいただき、誠に感謝を申し上げます。また、今年 5 月 29 日に東日本研究懇談会が開催されましたが、発表動画の事前配信と当日のオンライン討議という初めての形式がとられ、多くの方々にご参加いただき好評でした。研究懇談会東日本部会幹事・松本剛会員と西日本部会幹事・村野正景さんのご尽力によるものです。これらの対応策は、結果として学会運営経費の削減にもつながり、それをもとに今年度は会費減額措置をとることも可能となりました。

また、今期役員の中には、在外あるいは在外予定にもかかわらず、学会運営に携わることを快諾していただいた方が含まれています。そして、オンラインによる会議や協働作業によって、支障なく役割を果たしていただいています。

以上のような取り組みの中で、「ポストコロナ」においても有効なものについては、今後も積極的に活用していきたいと考えております。

最後になりますが、会員のみなさまには、引き続き感染拡大防止とご健康に留意していただくとともに、このような状況にあっても、研究

活動において常に前向きな姿勢を共有していただきますことを、お願い申し上げたいと思います。

第 13 期 (2021.1.1~2022.12.31) の役員紹介

選挙結果と井口欣也新会長の任命により、第 13 期役員が決定しました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

会 長	井口 欣也 (埼玉大学)	運営委員	
代表幹事	井上 幸孝 (専修大学)	会 計	浅見 恵理 (埼玉大学等非常勤講師)
監査委員	長谷川 悦夫 (埼玉大学等非常勤講師)	編 集	山本 睦 (山形大学)
	芝田 幸一郎 (法政大学)		福原 弘識 (埼玉大学等非常勤講師)
事務幹事	佐藤 吉文		市川 彰 (名古屋大学共同研究員)
	(南山大学人類学研究所非常勤研究員)	広 報	宮野 元太郎 (東亜大学)
事務幹事補佐	小林 貴徳 (専修大学)		ダニエル・サウセド・セガミ
			(立命館大学)
		研 究	松本 雄一 (山形大学)
		会 報	千葉 裕太 (南山大学特別任用講師)
			五木田 まきは (東京文化財研究所)

学 会 か ら の お 知 ら せ

●古代アメリカ学会主催第 3 回公開シンポジウムの開催について

渡部 森哉 (南山大学)

古代アメリカ学会では、科学研究費補助金 (研究成果公開促進費) により、古代アメリカ学会主催第 3 回公開シンポジウム「まなぶ、たのしむ南北アメリカの古代文明 ——研究成果から学びの場へ——」を 2021 年度に開催する予定です。2021 年 12 月 19 日 (日) に岡山コンベンションセンター、2021 年 12 月 26 日

(日) に東京大学伊藤国際学術研究センターにおいて対面形式で開催予定です。詳細につきましては、決定次第、メール、web ページでお知らせいたします。なお、新型コロナウイルスの感染状況によっては開催形式等を変更する可能性もあります。

特集：ウィズ・コロナ時代の研究活動

新型コロナウイルス（COVID-19）が日本国内、そして世界中で感染が拡大し始めてから、早くも1年が過ぎました。誰もがアフター・コロナの訪れを願うものの、終わりの見えないウィズ・コロナと呼ばれる「新しい生活様式（ニューノーマル）」の中での研究のあり方を模索しています。そこで会報46号では、本学会会員がウィズ・コロナ時代においてどのような研究活動を行ってきたか、またこの新しい生活様式の中でどのような研究方法に可能性を見出しているのか、その思案については、多くの研究者にとってご関心があることと思います。今回初めての試みとして、会員の皆様にはオンライン・アンケートにご協力いただきました。アンケートの集計結果のみを紹介する予定でしたが、「コロナ下における他の研究者の動向が気になる」というご意見もございましたので、ご回答いただいた方々の中から、7名の会員の方々に記事をご執筆頂き特集を組むことにいたしました。本特集はきっと、これからの研究のあり方、新しい研究活動、そして今後も起こりうる感染拡大や新型の感染症への対策の一助となるような有意義な情報だと考えております。

●COVID-19 パンデミック下におけるパチャカマク遺跡博物館の取り組み

土井 正樹（関西外国語大学）

はじめに

COVID-19（新型コロナウイルス）感染症のパンデミックにより海外渡航が難しくなった結果、中南米での調査の中断を余儀なくされている会員も多いことと思う。また、大学教育に関わる会員は、授業の在り方がオンラインを中心としたものへと一変し、その対応に追われることにもなったであろう。

このように COVID-19 は本学会員の活動に大きな制約や変化をもたらしたが、変化にはマイナス面だけでなく、プラスの側面もあった。たとえば、研究大会や研究懇談会の開催がオンラインで行われるようになったため、居住地の制約がなくなり、日本国内だけでなく国際的な会議やシンポジウムにも参加しやすくなった。

実際に私も国際的な研究会や会議にオンラインで参加してきた。ここではその一例として、ペルーの「聖地パチャカマク遺跡博物館（El Museo de Sitio del Santuario de Pachacamac）」

（以下「パチャカマク博物館」と略記）を取り上げ、開館5周年記念イベントの一環として2021年2月15日に開催された、オンライン・バーチャル・ツアーについて紹介したい。さらに、このようなオンライン・イベントの利点と課題について考察を行う。

パチャカマク博物館

パチャカマク博物館はペルー文化省が運営する全部で52ある博物館のうちの一つであり、ペルー首都リマ市南端に位置するパチャカマク遺跡に併設された博物館である。設立は1965年にさかのぼる。現在の博物館は、それまでの博物館を近代的博物館として建て替えたものであり、2016年2月15日にオープンした。

この建て替え後、パチャカマク博物館では一般市民や小学生等に向けた講演会、見学会、体験学習会などのイベントが積極的に開催されている。それらのイベントの様子は公式ウェブサイト (<http://pachacamac.cultura.pe>) で見ることができる。

バーチャル・ツアー

「傑作品のバーチャル探訪（Obras Maestras: Visita virtual al Museo Pachacamac）」というタイトルでのバーチャル・ツアーは、ペルー時間で2月15日の午前11時から開催された。日本時間では午前1時になるため当初は参加を迷っていたが、ペルーでの博物館活動を知るよい機会になると考え参加してみることにした。

内容は、パチャカマク博物館の展示品の中から4つの代表的な展示品に焦点を当て、バーチ

ャル空間に再現された博物館内の展示品を考古学者の解説と共にたどっていくというものであった。

取り上げられた展示品は、パチャカマクの木像、パチャカマクの扉、神々に捧げられた土器、インカ女性の着物 (*acsu*) の4点であった。パチャカマク博物館を再現したバーチャル博物館内のこれらの展示品を順に鑑賞しながら、解説者による展示品の説明を聞いた。このバーチャル博物館の URL は <https://bit.ly/MSPAC_VisitaVirtual> となっており、現在もインターネット上で展示品を鑑賞することができる。また、このバーチャル・ツアーの様子は YouTube 上 (<https://www.youtube.com/watch?v=xegSfcu8EWU>) で公開されている。

利点と課題

海外からも気軽に現地の博物館の展示を見ることができるといえる点は大きな魅力である。すべての博物館に関して調べたわけではないが、ペルー国内の規模の大きな国立博物館（人類学・考古学・歴史学博物館、国立チャビン博物館、国立シパン王墓博物館など）では、同様の取り組みを行っていることを確認することができた。

また、オンライン・イベントの様子が録画されているだけでなく、YouTube 上で公開されていることも、大変有意義に感じた。動画の公開

期間は限定されておらず、いつでも視聴することが可能である。実は今回の記事も、その動画を見返しつつ執筆したものである。

一方課題もある。このようなイベントの情報をどのように入手し、共有するのかという問題である。私がこのイベントの開催を知ったのは、ペルーの友人からのメール連絡を通じてであった。このようなイベントに関しては、Facebook などの SNS を通じて告知されることが多いが、個人で SNS 上の膨大なイベント情報を把握することは困難である。

その解決案として、本学会ウェブサイト上に設置されているイベント情報欄の活用があげられる。この欄には学会主催・協力によるイベント、学会員が関わるイベントのほか、その他古代アメリカ関連のイベント情報を掲載するコーナーが設けられている。この「その他」のコーナーに、会員からのオンライン・イベントに関する情報を集約してみてもどうか。ここに学会員から寄せられたオンライン・イベントに関する情報を掲載するのである。情報が集まりさえすれば、学会員はこのサイトにアクセスするだけで、古代アメリカに関連するオンライン・イベントについての世界中の情報を知ることができるであろう。窓口となる学会事務局の負担増が懸念され、またどれほどの情報が集まるかも未知数ではあるが、試してみる価値はあるのではないだろうか。

●コロナ禍におけるコレクション研究

吉田 晃章（東海大学）

はじめに

コロナ禍でメキシコにおいて発掘調査を実施することが極めて困難な状況で、現在東海大学文明研究所（所長 山本和重）所蔵の「アンデス先史文明に関する遺物」（通称アンデス・コレクション）の研究を進めている。以前からなかなか着手できずにいたコレクション研究であったが、まさにコロナ禍の 2020 年に時宜を得た。メキシコでの調査中止の状況とコレクションの概要を述べるとともに、

現在の研究状況を本会報にて紹介したい。

メキシコ西部地域での遺跡調査

筆者は 2016 年よりメキシコ西部ハリスコ州、ロス・アルトス (Los Altos) 地方のロス・アガベス (Los Agaves) 遺跡で調査を実施してきた。周辺では、岩絵群(線刻を含む岩面彫刻)が発見されている。刻点で構成される十字文様 (Pecked Cross) も 16 点発見されており、岩絵と遺跡の関係性について研究を行っ

ている（吉田他 2018 参照）。この遺跡を調査しているもう一つの理由は、西部地域に顕著な豎坑墓が発見される可能性があるからだ。グアナファト州を中心としたバヒオ伝統とハリスコ州を中心とした豎坑墓を含むテウチトラン伝統がいかに相互に影響しているのかに関心を抱いている。豎坑墓はおもに前 4 世紀から後 4 世紀頃までメキシコ西部地域に現れ、南米北西部海岸（コロンビア、エクアドル、ペルー）でも確認されている墓の形態である。筆者はこれまでペルーでの調査機会にも恵まれ、メキシコ西部でも調査を行ってきた経験から、アメリカ大陸における文明間の交流、特にアンデス文明とメソアメリカ西部の関係に興味を抱いており、これは従来の研究に通底する志向である（吉田 2016 参照）。

コロナ禍での調査中断

2020 年 2 月になって横浜を出港したクルーズ船で新型コロナウイルスに罹患した乗客が報告されたり、WHO が新型コロナウイルスを COVID-19 と命名したり、徐々に日本国内でも対応に追われていく様子が連日メディアで報道されていた。大学でも新型コロナウイルス対策がいくつか発表される中、2 月 19 日にはロス・アガベス遺跡の発掘調査のために先発隊として単身メキシコへ出発した。この時は、正常性バイアスが働き 2002-2003 年に中国を中心に流行した SARS のように、日本ではそれほど深刻な事態にならず調査も年度末までできるものと考えていた。2019 年度は東海大学総合研究機構の「岩絵群と神殿建築から究明する先スペイン期メキシコ西部の社会文化発展」というプロジェクトの最終年度で、最後にまとまった成果を得るつもりで調査に臨んでいたが、2 月中には調査を取り巻く環境はきわめて困難なものとなっていった。結局、2 月 28 日には「新型コロナウイルス感染症への対策について海外への渡航の禁止・中止のお願い（第一報）」が勤務先より出された。3 月初旬には総合研究機構のプロジェクト報告会で、一時帰国し報告後、3 月に再度渡航予定であったが、帰国 2 日前に、新型コロナの影響で報告会の中止を知らせるメール連絡が入った。口頭での発表はなくなり、ポスター掲示のみ

となった。しかしながら、後発グループの学生や他の教員との調整もあり、予定通り一時帰国した。結局、海外渡航の自粛を余儀なくされ、後発隊の調査は中止となってしまった。しかし、遺跡は発掘途中であり埋め戻しや支払いなどの撤収作業を行うために筆者だけは再渡航しなければならなかった。埋め戻しの人員も確保できず、地元の消防隊員に一部埋め戻しを手伝ってもらう羽目になった。結局わずかな人数で撤収作業に時間を費やし、3 月 23 日に帰国の途に就いた。次々と減便や欠航がでるなか、グアダハラからダラス経由の便に変更はなく、ダラス空港も閉鎖されることはなかった。無事に帰国したが、帰国後すぐに、海外からの帰国者は隔離が求められるようになり、綱渡りの帰国であった。

学内のコレクション研究

遡ること 7 年、学内でアンデス・コレクションの研究に着手しないかと声がかかったが、2014 年からは科研の基盤研究 (B) 「メキシコ西部地域の埋葬文化から探る文明間交流」（研究代表者 吉田晃章、課題番号 26300034）の調査があり、2017 年からも東海大学総合研究機構のプロジェクト「岩絵群と神殿建築から究明する先スペイン期メキシコ西部の文化社会発展」（研究代表者 吉田晃章）で発掘調査を継続しており、コレクションと時間をかけて向き合うことができなかった。それでも、2017 年から東海大学文明研究所内に研究プロジェクト「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」（研究代表者 山花京子 [文化社会学部]）が立ち上げられ、代表者のもと大学が所蔵する「古代エジプトおよび中近東コレクション」とともに公開・活用に向けた環境の整備がすすめられた。アンデスの遺物については保管状況の改善や遺物台帳との照合作業等が実施された。楽器やガラス玉、また笛吹ボトルについても学内外の研究者と共同研究が実施され 2019 年度末には小規模ながら「古代エジプトとアンデスの色彩」展を開催した。

2020 年度からは第 2 期プロジェクト「東海大学所蔵文化財活用のための基盤整備 II」（研究代表者 山花京子）がスタートし、第 1 期か

ら継続していたホームページ開設に関する仕事が本格化し始めた。掲載する収蔵品はすでに選定されていたが、いずれも検品がなされておらず、真贋が不明であった。研究機関としては公開する遺物に贋作が入っていたり、不用意な補修でオリジナルのイメージを損なうものがあるのではないかと考え、海外研究ができない期間を利用し、少なくともX線で検品をすることにした。それと同時にエジプトの遺物と共に、長年アンデスの遺物もご担当いただいていた山花京子氏から引継ぎを行い、文化財プロジェクトのサブリーダーとしてアンデス・コレクションを研究や教育、社会還元を活用することとなり、改めて軸足を置いてコレクションと向き合うこととなった。

アンデス・コレクション

研究について触れる前に、アンデス・コレクションについて簡単に述べておきたい。これは、2021年4月1日現在1918点を数える国内でも有数の規模を誇るコレクションである。コレクションの内訳は、土器等が1063点（約55%）、織物が411点（約21%）と続き、金属器39点、石器12点、木製品・貝製装身具等166点に及んでいる。中には、金製や銅製の仮面も存在する。文化別では、ナスカ文化の遺物が291点と多く、次いでチャンカイが続く。チャンカイの場合は200点以上を織物が占めている。右上の表は、2017年時点で合計が1695点の検品途中のものであるが、整理をする中で、さらに遺物が確認されて、現在の総数に至っている。

コレクションの来歴については、東海大学が所蔵する以前は、出光美術館が所蔵していたが、松本亮三氏（現東海大学名誉教授）の尽力により同美術館と大学で2004年3月16日に覚書が交わされ、東海大学に所蔵が移ることとなった。コレクションについてのまとまった記述は、出光美術館所蔵時代の『アンデスの染織』（出光美術館 大平秀一編、1997年）、展示図録『ラテンアメリカプロジェクト 生命と自然』（松本亮三総監修・横山玲子監修、2011年）、展示図録『古代エジプトとアンデスの色彩』（大平秀一・吉田晃章・山花京子編集、2019年）があり、これまでも研究と公開

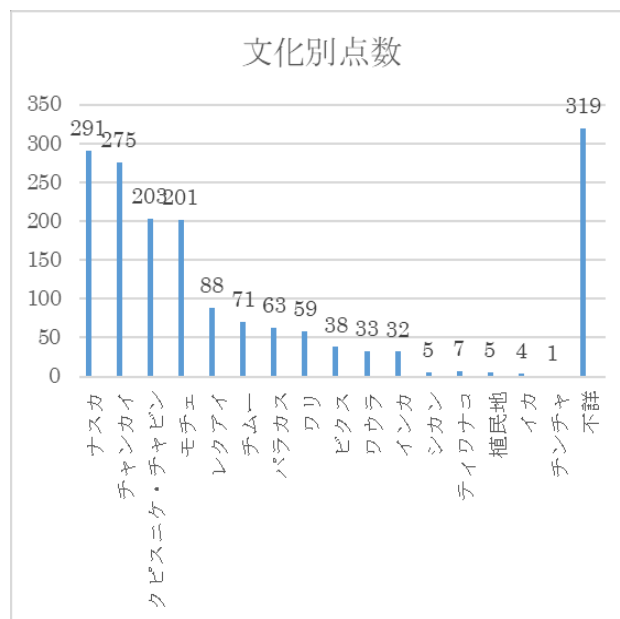


表 文化別所蔵点数

がなされてきた。出光美術館が所蔵する以前については、一部の土器に Ohara Art Gallery というステッカーが貼られており、かつて小原芸術参考館の所蔵品であった可能性がある。小原芸術参考館は全面改装し豊雲記念館として、神戸市東灘区にかつて開館していたが¹、現在中南米のコレクションは京都外国語大学に寄贈されている。さらなる調査が必要であるが、コレクションの一部はいけばなの三世家元である小原豊雲が鬼集した中南米の土器と染織品に由来するだろう。

収蔵品の維持管理にはある程度の費用がかかり、所蔵しているからにはその活用は常に課題となる。そこで、まずは大学が貴重なコレクションを所蔵していることを広く一般に知っていただくとともに、研究・調査のきっかけとなるよう、アンデス・コレクションをホームページで公開する事業を展開することになった。

アンデス・コレクションの担当を引き継いだ2020年6月時点でホームページ公開事業は決定しており、研究機関として公開する遺物の真贋問題に早急に取り組まざるを得なかった。なぜなら、アンデス由来の土器には、一定量の贋作や補修品、あるいはオリジナルパーツを利用し新たな遺物に仕上げる変造品²などがあるためだ。コレクションは残念ながら出土コンテクストがない遺物なので、真贋や補修の問題もあり、研究・調査に活用する

段で敬遠される場合もある。この問題をクリアすべく、ホームページ公開前に検品する体制を整えた。それは、学内の研究施設にある X 線 CT 装置を使用した検品作業である。

東海大学イメージング研究センターでの分析

東海大学には、イメージング研究センター (TICAR) という名称のセンターが存在するが、これは 2016 年 8 月に当時世界最先端の技術を持つ株式会社ニコンインステックと包括協定を締結することにより、産学共同利用施設として設立されたものである。ニコン社製のバイオ用各種顕微鏡と産業用イメージング機器類を備えている。株式会社ニコンとしても新しいスキームのイメージングセンターで、バイオ用として正立・倒立光学顕微鏡、実体顕微鏡、共焦点レーザー顕微鏡、全反射照明顕微鏡を配置し、産業用機器は X 線 CT 装置、白色干渉顕微鏡、卓上 SEM を備えている³。

2017 年から始動してきた文化財プロジェクトは、上述の TICAR や東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター (所長 喜多理王) など理系分野の研究者と共同研究を図っていた。そこで、コレクションを検品するに当たり、TICAR のニコン社製 X 線 CT 装置、XT H 225ST (処理プログラム Inspect-X, CT Agent, CT Pro3D) を使用し、撮影を行うこととした。3D 構築用の産業用 CT データ解析システム VG Studio MAX (ポリウムグラフィックス社製) を使用することで、土器の修復痕や形成痕、表面の細かな調整痕まで観察することが可能で、画像解析により無機物の混和剤 (砂粒) などの割合やその粒子の数、土器成形における接合部分の空隙などの体積までも検出することが可能である。

このようにして始まった分析では、ナスカ文化の土器 (図 1 上) から骨製縦笛が検出されるなど、新たな発見もあった (図 1 下参照)。現在、骨の年代測定や種の同定に関する分析を実施し、土器と骨製縦笛の関係についても調査中である。



上. 橋型把手付双注口壺 (東海大学文明研究所所蔵番号 11571-648)



下. X 線 CT 画像で検出された骨製縦笛 (ケーナ)

図 1 橋型把手付双注口壺と骨製縦笛

また、残念ながら研究者の目をも欺く巧妙な補修がなされた土器や土製品を複数検出する結果となった。ものによっては、公開に適さない程度に補修された遺物もあり、ホームページ公開に向けて最低限の選別を行った。

2021 年 3 月時点で 114 点の土器を X 線 CT にかけてところ、38 点 (33%) は何らかの補修がなされていることが分かっている。中にはオリジナルパーツを使用した新たな創作品あるいは変造品も検出された。その技術は巧妙で、修復技術の解明も今後のコレクション研究においては重要なテーマとなるだろう。個人的には今まで現地で本物の出土遺物を見てきた経験を欺かれるようで、正直落胆の日々であった。

コレクションのホームページ公開

こうして、検品を終えて、ようやく 2020 年 11 月 26 日に、本学が所蔵する「アンデス・コレクション」を紹介するウェブサイトを開くことができた (図 2)。ウェブサイトでは膨大な資料の中から土器や布製品など 201 点の画像を掲載している (2021 年 6 月 10 日現在)。ピクス文化の笛吹ボトルやカラフルな鳥の羽が木綿に縫い付けられたナス

カの貫頭衣など、アンデス各地で栄えた文化の遺物の数々をご覧いただけるように整備されている。また、アンデス文明の概要解説や、研究活動・展示会情報などを紹介するコーナーも用意し、運用を開始したばかりである。今後は、3DモデルやCT画像なども掲載していくことを検討し、準備を行っている。他の博物館ではホームページ上に補修の有無を記載するのはまれであるが、研究機関の責務として補修の有無を表示するようにしている。研究機関のコレクション公開方法として、修復の有無の記載は今後スタンダードになっていくのではないだろうか。

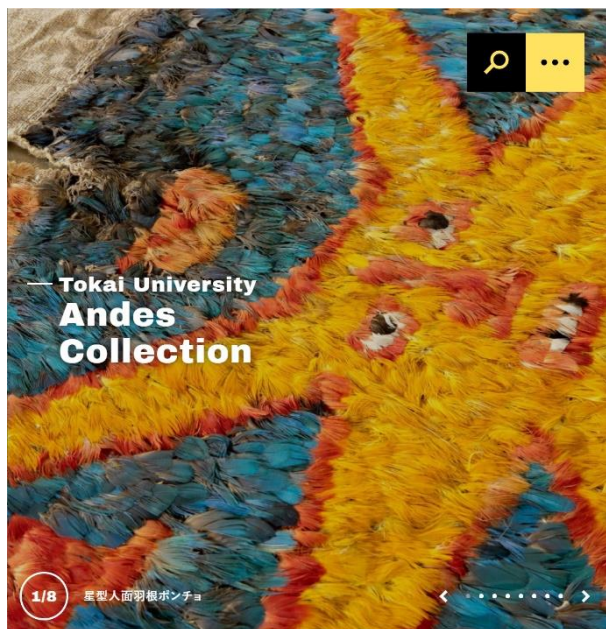


図 2 東海大学アンデス・コレクションホームページ (<https://andes-tokai.jp/>)

星形人面羽飾り貫頭衣 (東海大学文明研究所蔵番号 9983-261)

おわりに

昨年度までにアンデス文明の各文化を専門とする学会員の協力をえて、遺物の真贋裁定を行ってきており、関係各位にはこの場を借りて御礼申し上げたい。今後も遺物の検品作業に傾注するとともに、学内外の研究者と X

線 CT や光学機器を使った資料の研究を進めていきたいと考えている。X線 CT 撮影によるコレクションの真贋裁定に関する手法を各文化で確立できればと、手始めにピクス文化の土器を中心に胎土の介在物解析 (無機物の混和剤に関する解析) とグレーバリュウ解析 (グレースケールの CT 画像の解析) を行っている。ワウラ文化の遺物の真贋裁定を依頼した市木尚利氏 (立命館大学) とは共同研究にも着手している。また鶴見英成氏 (東京大学) と真世土マウ氏 (岡山県立大学) と笛吹ボトルの構造分析を継続して行っている。

コロナ禍におけるコレクション研究は、フィールドだけでは出会うことのない研究者と出会うきっかけを与えてくれ、複数の共同研究に取り掛かることができた。また所属先の施設の有効活用という点では、調査に出られない期間に X線 CT 装置を扱うスキルを身に付け、新たな分析手法に習熟することができた。これは今後ロス・アガベス遺跡から出土する遺物の調査・研究においても活用できそうだ。文化別所蔵点数の表でもわかるように文化不詳の遺物も多く、各文化を専門とする学会員のお力添えをいただいで、1点でも多く帰属文化を明らかにできればと思っている。

さらに、メソアメリカとアンデスの両文明の研究を同時期に実現できることは、またとない機会である。直接的な関係解明につながるまでも、メソアメリカとアンデスの文明間の相互関係の一端でも紐解ければと願っている。

1 財団法人小原流 1998 年 図録『アンデスの染織と工芸—豊雲記念館所蔵—』。

2 「変造品」という用語については、天理大学附属天理参考館 荒田恵編 2021 年 図録『器にみるアンデス世界』を参考にさせていただいた。

3 喜多理王 2018 年「東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター」『日本バイオレオロジー学会誌 (電子版)』32 (1) : 30-31。

●新型コロナウイルス影響下における考古学調査と現地の共同体：メキシコ合衆国ベラクルス州南部の事例

古手川 博一（ホンジュラス国立自治大学）

エステロ・ラボン考古学プロジェクト

エステロ・ラボン考古学プロジェクトは2012年から始まり、2015年までに3回の発掘調査を経て現在も継続中の考古学調査である。遺跡は、メキシコ合衆国ベラクルス州南部に位置し、先古典期にはサン・ロレンソやラ・ベンタの二次センターとしてオルメカ社会を支え、古典期後期・終末期のヴィジャ・アルタ期の社会では重要な都市として栄えたと考えられる。

このプロジェクトの考古学的な関心は、オルメカ社会の中でサン・ロレンソなどの首都とは異なり社会的階層が下位の集落・集団がどのような生活を送り社会を支えていたのかを探ることにある（Kotegawa 2015, 2017a, 2017b, 2018, 2020, 古手川 2021）。また、長期間、学術的な調査が実施されず、遺跡や考古遺物の公的な保護もされてこなかった当地で、現地の共同体と考古学が今後どのように良好な関係を築いていくことが可能なかを模索し、考古学が現代社会の中でどのように共生していくことができるのかを明らかにするパブリック考古学的な目的もある（Kotegawa y García Hernández 2017）。

当初、ベラクルス大学の考古学実習の一環として教育面に重点を置いて始まったプロジェクトであるが、現在は私が職場を移動したこともあり、先述の学術的な関心に重点を置いた調査を実施している。もちろん、メキシコ人をはじめ学生たちへの門を閉じているのではないが、彼らとの直接的なコンタクトが薄れてしまい、そのような機会に恵まれていない。もちろん、今後機会があれば前途有望な考古学者の育成も続けることができればと思っている。

2019年秋からは、日本学術振興会の科学研究費助成金の研究活動スタート支援により、「移民社会におけるパブリック考古学を通じて考古遺産を利用したアイデンティティ再構築」（19K231190001）という研究を、本プロジェクト出身の若いメキシコ人考古学者に手伝ってもらいつつ実施している。

COVID-19の影響と対応

この科研費の研究では計画の段階では発掘調査も予定していたので、2020年1月に現地を訪れた時に村人にも報告し承してもらった。しかし、2020年3月頃からホンジュラスやメキシコでも本格化した新型コロナウイルスのパンデミックによって、私自身もメキシコに行くことができず、メキシコにいる協力者も国内移動することが困難な状態になってしまった。そのため、急遽、発掘調査をしない方向で計画の変更をする必要が生じた。幸い、研究の主要テーマである現代住民のアイデンティティ再構築への考古遺産利用の効果を調査するにあたって、予定していた発掘データは補足的な役割だったので、研究を中止するまでには至らなかったが大幅な遅れを引き起こし、結果的に研究期間延長を申請することになった。

基本的に他者との接触を避けるために家から出ないことを求められる中、まず思い浮かんだことはインターネットの利用である。最初に手掛けた作業は、以前実施したエステロ・ラボン考古学プロジェクトに関する写真展の資料を使って、「バーチャル写真展」開催の準備を始めることであった（写真1）。これが思いの外、時間がかかってしまい、およそ1年がかりでようやく準備が整いつつある。

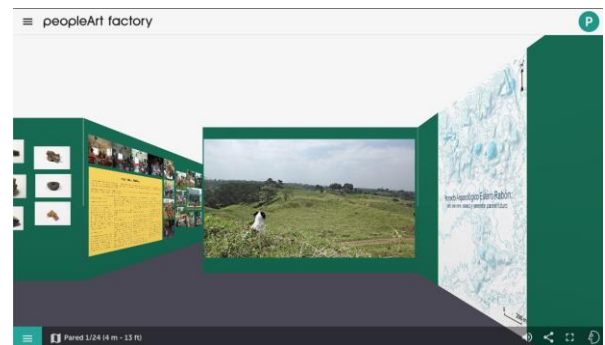


写真1 バーチャル写真展

インターネットを利用した他の活動としては、調査中に撮影した写真を利用したジグソー

パズル作成とその普及である。幸い自動でパズルを作ってくれるホームページが無料で利用できたので、2020年6月下旬から毎週末に3~5種類ほどのパズルを作成し、Facebook上に開設してあるプロジェクトのページで共有するようにした。その際には写真に関わる遺跡や考古学の簡単なトピックスを織り交ぜた。2020年末までにおよそ130枚のジグソーパズルを公開した(写真2)。

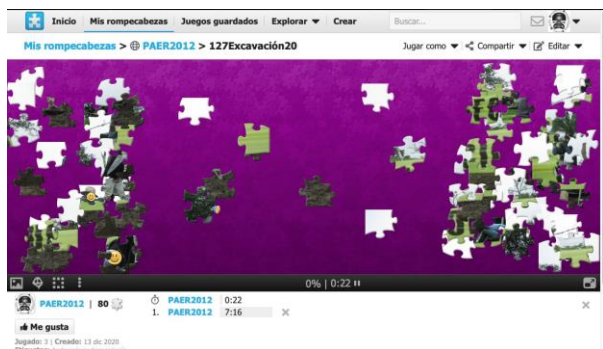


写真2 ジグソーパズル

インターネットを通じた子供向けの教室や、大人向けの講演も計画に上がったが、後述する理由から現在までその実施には至っていない。しかし、当遺跡からはオルメカ文化の石彫が8体報告されており、現在3Dデジタル化を試みている。これらを用いた今後の活動についてもさらなる調整が必要である。

インターネット以外の考古学普及ツールとしては、家族で遊ぶことができる、メキシコで一般的なボードゲーム「Lotería」を遺跡や考古学に関係する画像を使って作り、村の各家庭に送った(写真3)。



写真3 ボードゲーム「Lotería」

また、これまでの調査の成果をまとめた一般向けの小冊子を作ることにした。予算の都合上、こちらから村人たちに用意できたのは2冊だけであったが、元データはデジタルなので今後、インターネットを介しても普及することは可能である。現段階では、後述するように市役所の責任者との会合で彼らが村の各家に届くように増刷してくれることになった(写真4)。

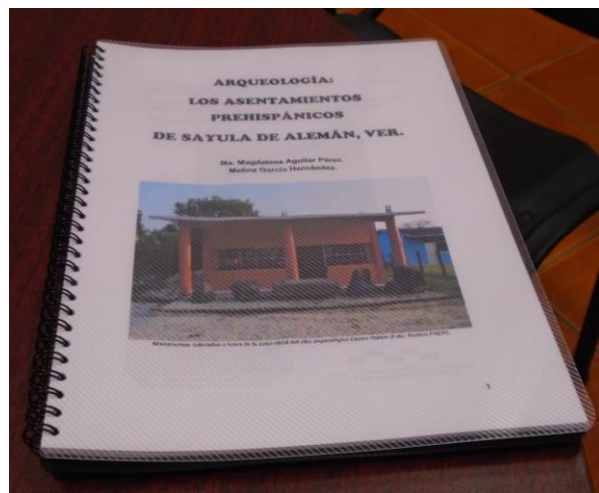


写真4 一般向け普及用冊子

このような様々な考古学的知識の一般向け普及作業を行ったのは、父母や祖父母の世代に他地域から移り住んだ村人たちが、このような活動を通じて考古学に親しみ、考古学を通して現在彼らが住む土地との深い繋がりを見つけ、彼ら独自のアイデンティティを構築することが可能であるのかを検証するためである。したがって上述の普及活動の効果を見る必要があるのだが、その方法としてインターネットによるアンケート調査を用意した(写真5)。



写真5 インターネット・アンケート

「対応策」は本当に有効だったのか？

上述のように、新型コロナウイルスによるパンデミックの中、感染拡大を避けるための様々な対応策をインターネット活用の中に模索して準備し、いくつかは実施してきたのだが、その過程で大きな問題に直面することになった。それは、我々が調査対象としている共同体が十分なインターネットアクセス環境を備えていないという点である。よくよく考えれば当たり前である。数年前までは携帯電話の電波すら届いていない村だったのである。村人の中で、上述のようなインターネットを媒体としたツールにアクセスできるスマートフォンを持っている者の数はそれほど多くはない。仮に、スマートフォンなどを持っていても、携帯電話のデータを使ってインターネットに接続するので、現金収入が少ない村人たちにとって通信料はそれほどお手軽なものではない。

つまり、新型コロナウイルスのパンデミックを機に様々な変更を加えて対応策を探し、インターネットを利用した「バーチャル」な活動を含めて実施してきた調査の中で、実際に効力を発揮することが可能であるのは、やはり、「リアル」な活動になってしまうようである。

ただし、この状況が良い意味で我々の研究形態を変化させてくれたのも事実であろう。例えば、現地の協力者とのコミュニケーションが、これまではメールあるいは WhatsApp などのメッセージツールが主流だったが、今ではビデオ会議などで数人のメンバーとリアルタイムで話をしながら情報を共有したり、議論したりすることが容易になった。もちろん、それらのツールは以前から存在していたのであるが、今回のパンデミックまで使う必要性も感じられず、存在すら知らないものが沢山あった。しかし今回、必要に迫られたおかげでその存在や使用方法を知ることができ、コミュニケーションという点では大きく前進できたと感じられる。

昨年の本学会の総会もそうであったが、本年実施されたアメリカ考古学会や日本考古学協会もオンライン開催になった。学会だけではなく、様々な研究機関や研究グループも、ウェビナーなどのセミナーや講演会を無料で開催し、多くの参加者を集めることに成功している。まだま

だ、色々と解決すべき問題もあるようであるが、これは私のように海外に住む者にとっては発表する機会が増えることになるし、多くの人にとってより容易な参加の可能性を提供してくれた。以前のように高い飛行機代や宿泊費の出費、そして何日も仕事を休む必要がなくなり、研究成果の発表がしやすくなると思われる。

現地の状況と人々の反応

上述のように、現在の研究テーマから発掘調査は中止としたものの、どうしてもバーチャル空間でできることには限界があることが分かってきた。幸いホンジュラスの国境封鎖も 10 月には解除され、メキシコ国内の感染状況も 12 月の段階でベラクルス州は「緑信号」になっていた。私自身、パンデミックの影響を受けてホンジュラスでの滞在許可延長の申請手続きすることができなかったので、国外に一度出る必要があったこともあり、2020 年から 2021 年の年末年始の休みを利用してメキシコに行き、現地調査を実施することにした。それまで 9 ヶ月以上自宅に閉じ籠る生活を続けてきたので、空港のような人の多い場所に出ることや、見知らぬ人々と狭い飛行機に乗ることは怖かったが、未だ不慣れたホンジュラスに 1 人でいる状況を変えたいという気持ちの方が強かった。私にとってメキシコは調査地であるというだけでなく、20 年近く住んだ第二の故郷でもある。

12 月 24 日夜にメキシコシティのベニート・ファレス国際空港に着き、市内のホテルに向かった。クリスマスイブの晩だったからなのか、それとも新型コロナウイルスのパンデミックの影響なのか私には分からなかったが、街は閑散としていた。数日前からメキシコシティの感染状況は「オレンジ信号」になっていた。しかし、タクシーの運転手はクリスマスイブだからだと私に答えた。翌日は、手配したレンタカーを友人から受け取るためにメキシコシティ郊外の彼らの家まで行き、そこからベラクルス州ハラパ市まで運転して行くことになっていた。普段は交通量が多いメキシコシティであるが、この日は交通量も少なく簡単に抜けることができた。これも、クリスマスの朝だからなのか、新型コロナウイルスの影響なのか判断できなかったが、

友人たちはクリスマスのせいだと言った。

ハラパ市滞在中は、これまでの発掘で出土した遺物やデータ整理をする予定であった。また、2021年1月には実際に調査地を訪問して、アンケート実施、これまでの調査成果に関する講演、そして今後の調査計画の報告をする予定だったので、その準備の買い出しなどもして年を越した。街の中は人の数も疎らで、少ないながらも出歩いている人たちはきちんとマスクを着用していた。マスクの着用は明らかにコロナウイルスの影響であるが、この時期に人が少ないのは学園都市であるハラパではいつものことである。聞けば、地方から来ている学生はパンデミックの影響でオンライン授業になった後に、実家に戻っている人も多いとのことだったので、ハラパの街の人口も確実に減っていたのだろう。

この間に調査地の人たちとコンタクトを取り現地状況を聞きながら、本当に調査地に行くことが可能であるか探っていた。結果的に可能だと判断し、念のためにPCR検査も受け陰性判定を得た上で実行した。また、現地でのいかなる状況にも対応できるように様々な感染防止準備も行ない(写真6)、移動にも公共交通機関ではなくレンタカーを使用した。当初、現地調査はメキシコ人考古学者と行く予定であったが、急遽、行けなくなってしまい、ハラパ在住の黒崎充氏が同行してくれることになった。



写真6 感染防止対策例

調査地のサユーラ・デ・アレマン市に着いて最初に実施したのは市役所の責任者との会合で、現地の状況の詳しい情報を得ることが第一の目的であった。事前にニュースで得ていた情報では、メキシコ国内の小さな集落では、外部の人が訪問することを自主的に禁止しているという報告があった。調査対象となっている遺跡のある村は、市の中心から離れた地に位置するおよそ20家族ほどが住む小さな村である。そのような心配も市役所の責任者に聞いてみたが、当地はそのようなことはないということであったので、翌日は予定通り遺跡のある村に移動することにした。この会合の第二の目的は、以前この責任者の方から要請された前述の小冊子が完成したことの報告と、この小冊子の印刷と拡散に協力をお願いすることであった。この方は以前から我々のプロジェクトに大変興味を持ってきており、今回も快く協力してくれ、翌日までに可能な限り印刷して村に送ってくれると約束してくれた。このサユーラ・デ・アレマン市は小さな市であるが、市長を筆頭にとっても精力的に仕事をしており、文化事業にもとても力を入れている。今回のパンデミックの間もそれは変わることなく、感染防止策を実施しながら様々な事業を行っていた。彼らの継続的な活動が他の市民たちの生活を滞らせることなく、極端な閉鎖的な状況を生み出さず、今回の我々の訪問とプロジェクトの継続を喜んで受け入れられる状況を作り出してくれたのだろう。

翌日、実際に村に着いてみると以前同様の穏やかな村の様子であった。村人に聞いてみると、外からの訪問者もほとんどなく、ウイルスの感染者も全くいないということであった。マスクを着用している村人も半分もいなかった。なんとなくベラクルス州南部の町の雰囲気がメキシコシティやハラパ市と違うと感じていたのであるが、その理由がマスクを着用していない人の多さであることに気がついた。村だけでなく、前日訪れたサユーラ・デ・アレマン市も宿泊しているアカユカン市でも、公共の場で働く人たちはマスクを着用しているが、それ以外の人たちはあまりマスクを着用していないのである。何が理由でそうなっているのか、数日の滞在では分からなかったが、何か理由があるのかもし

れない。この地からそう遠くない街では比較的多くの感染者が出ていることはニュースになっていたので、決して感染が拡大していないということではない。他の理由があるはずである。考えられるのは、熱帯性の気候であろうか。幸か不幸か、我々が訪れた時は、比較的気温も低く過ごしやすい気候であったので、通常気温が高く湿気の多いこの地で日常的にマスクを着用することがどれほど大変なのかは知ることができなかった。

調査地の村ではこの日、政府主導で実施されている地方活性化プログラムの「Sembrando Vida」の共同作業が行われていたので 20 人以上の村人が共同耕作地に集まっていた（写真 7）。そこで、その場でアンケート用紙を配布して、すぐに回答ができる人には回答してもらうことにした。それ以外の人たちには各家庭を訪問して、翌日、もう一度来るのでその時まで回答してくれるようお願いした。



写真 7 共同作業中の村人たち

翌日はアンケート用紙の回収と、これまでの調査の成果を発表するという予定になっていた。夕方開始時刻には大人と子供を合わせて 30 人くらいが集まってくれた（写真 8）。

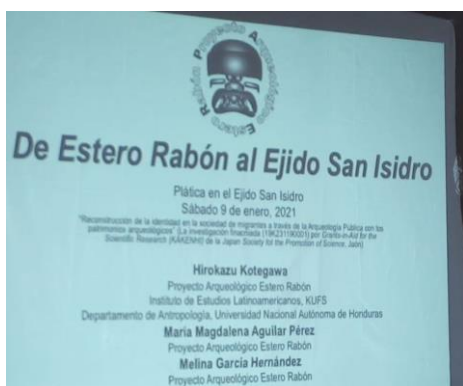


写真 8 サン・イシドロ村での講演

講演の後には、前述の小冊子を市役所が約束通り印刷して届けてくれたので、参加者に配布した。また、今後の調査の予定も説明し、彼らから色々な意見を聞くことができた（写真 9）。特に印象的であったのは、このような状況であるにも関わらず、多くの村の人たちが、我々が調査に戻ってくることを期待しているということであった。その本意がどこにあるのかは定かではないが、少なくとも、プロジェクトは村人たちからは拒否されてはいないということは評価しても良いのかもしれない。我々の調査が実施されれば僅かながらもこの小さな集落に外部の現金がもたらされるということも理由の一つなのであろう。しかし、彼らの友好的な態度はおよそ 10 年間継続してきたプロジェクトを通じて信頼関係が築かれ、我々を友として受け入れてくれており、村の大きな文化資源でもある遺跡やそこから見つかる考古遺物に対する保護活動とともに、この地の歴史に対する関心が高まりつつあると期待したい。また、市役所の職員が積極的に様々な遠隔地にある小さな村落を訪れ業務を継続していることや、前述のメキシコ政府主導の地方活性化プログラムで村人たちが集まり、共同耕作地で頻繁に作業をするという環境が以前と変わらない生活の継続を促しているのかもしれない。



写真 9 小冊子を見る村人たち

今回の新型コロナウイルスのパンデミックで多くの人たちが今までにない経験をした。その経験は肉体的にも精神的にもとても辛いものであっただろう。そのような状況の中、サン・イシドロ村の人たちが我々をいつも通りに受け

入れてくれ、本格的な調査の再開を待ち望んでいると言ってくれたことは、本当にありがたいことである。しかし、同時に調査を実施するものとしては、その言葉に甘えるだけではなく、彼らや調査に参加してくれる考古学者たちの安全を真剣に考えることの重要性を再考するきっかけになった。今は、村の状況は安全なのかもしれないが、新型コロナウイルスのパンデミックは世界中で収まる気配を見せず、より深刻な状況になりつつある。ワクチン接種の実施状況も国によって様々である。メキシコは比較的順調に進んでいるようであるが、ホンジュラスではまだまだ色々な問題があるようで先が見えない。そんな中で、パンデミックの渦中にある研究者として何か後世の役に立つ情報を残すことができたならば幸いである。

謝辞

本稿は、日本学術振興会の科学研究費助成金の研究活動スタート支援による「移民社会におけるパブリック考古学を通じて考古遺産を利用したアイデンティティ再構築」(19K231190001)における調査を基に執筆した。また、今回の調査に協力してくれているロベルト・ルナゴメス・レジェス氏、メリーナ・ガルシア・エルナンデス氏、マリア・マグダレーナ・アギラール・ペレス氏、黒崎充氏、サユーラ・デ・アレマン市役所、サン・イシドロ村の人々に感謝の意を表したい。

参考文献

古手川博一

- 2021 「コラム③エステロ・ラボン」『メソアメリカ文明ゼミナール』(伊藤伸幸 監修) pp.95-97、勉誠出版。

Kotegawa, Hirokazu

- 2015 Después de los olmecas. *Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto*, No. 15. pp.67-95.
- 2017a Estero Rabón. Tradición regional e impacto cultural foráneo. En *Arqueología de la Costa del Golfo. Dinámicas de la Interacción Política, Económica e Ideológica*, (L. Budar, M. Venter y S. Ladrón de Guevara (eds.)). pp.117-128, Universidad Veracruzana, México.
- 2017b Posibles imágenes del trono olmeca encontrado en Estero Rabón, Veracruz, México. En *XXX Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala, 2 Tomos*, (Bárbara Arroyo, Luis Méndez Salinas y Gloria Ajú Álvarez (eds.)). pp.749-758. Ministerio de Cultura y Deportes, Instituto de Antropología e Historia, Asociación Tikal, Guatemala.
- 2018 El trono de Estero Rabón. *Arqueología Mexicana*, Núm. 150, pp.56-57.
- 2020 Aspectos acuáticos de Estero Rabón: Reconstruyendo las actividades realizadas. En *Uso y Representación del Agua en la Costa del Golfo*, (Lourdes Budar y Sara Ladrón de Guevara (eds.)), pp.219-232, Universidad Veracruzana e Instituto Literario de Veracruz S.C., México.
- Kotegawa, Hirokazu y Melina García Hernández
2017 Arqueología Pública en Estero Rabón. *La Ciencia y El Hombre*, Vol. XXX, Núm. Especial, pp.42-49.

●コロナ禍のエルサルバドル

相場 伸彦（名古屋大学博士前期課程）

はじめに

COVID-19 感染者確認前と確認後で、エルサルバドル国内がどのように変化し、そのことが調査に与えた影響について私の経験をもとに報告したい。通常は宿舎に寝泊まりしながら、発掘調査や出土遺物の整理作業を現地作業員と共に行う。私はこれまで何度かエルサルバドルを訪れているが、日常的にマスクを着用している人々を見たことがない。

COVID-19 感染者確認前のエルサルバドル

私は 2020 年 2 月 21 日から 3 月 25 日にかけて、エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡カサブランカ地区内の博物館で調査を行っていた。日本からの参加者は私を含め 3 人であった。調査内容は土器洗い、遺物整理、実測図作成などの内業を中心としたものだった。まだ COVID-19 が蔓延していなかったこともあり、3 月上旬まではコロナ前と変わらない生活を送りながら、遺物の整理作業を進めていた。現地作業員は全員顔なじみであったため、COVID-19 をあまり意識することなく現地での作業に取り組むことができた。

日常会話の話題に COVID-19 の話があがることは多く、現地作業員とは新聞やラジオ、SNS などから入手した COVID-19 に関する情報について話し合うこともあった。その当時猛威を振っていた地域の一つがアジアであったため、日本の状況を聞かれることもあった。また、咳をすると、「コロナ？」と冗談を言って笑い合うこともあった。

調査期間中のスーパーや飲食店は通常営業だった。スーパーや飲食店では人数制限がかけられることはなかった。乾季だったこともありプールに入ることもできた。プールは早朝にもかかわらず老若男女多くの人々で賑わっていた。

COVID-19 感染者確認後のエルサルバドル

調査期間も終盤にさしかかり、エルサルバ

ドル出国まであと数日というところで、エルサルバドル国内で感染者が確認された。3 月の中旬であったと思う。空港が封鎖されたこともあり、COVID-19 が蔓延し始める数日間をエルサルバドルで過ごすことになった。期せずしてコロナ禍のもとで調査を進めることになったが、宿舎における内業（遺物整理、実測図作成など）が中心であったため、作業に支障をきたすことはなかった。一方で、現地作業員の人数や労働時間が制限されること、加えてマスク着用の推奨といった環境の変化があった。帰国困難な状況とそのような環境の変化のなかで精神的な疲れを感じるが多々あった。

滞在中は帰国できるかどうかわからなかったが、運がいいのか悪いのか、日本に戻ることができた。今回の調査は発掘を伴わない内業であったため、コロナ禍といえども調査を行うことに対する周囲の視線を気にする必要はなかった。

現在の研究状況

日本に帰国してから今日までの研究は文献の収集とデータの整理が中心になっている。昨年度の学生の卒論や修論の内容を見る限り、日本考古学を専門とする学生は、報告書を中心に分析したものや資料調査をできる地域に研究テーマを変更した論文が多く見受けられた。日本国内ですらこのような状況であり、この状況は現在も続いているため、エルサルバドルの調査をいつ再開できるかはわかっていない。そのため、現状が改善されないのであれば、私自身の研究内容を変更することも考えている。

おわりに

COVID-19 が世界中に蔓延してから 1 年以上経過した。コロナ禍でリモートワークが推奨されるようになり、便利なこともある反面、研究機関の連携や官学連携の側面で不便と感

じることがある。

私の場合はコロナ前に一般企業に対して資料提供の依頼を行っていた。その際は企業を直接訪問してディスカッションを行い、その後メールでのやり取りをすることで資料提供を受けることが可能になっていた。しかし、コロナが蔓延した 2020 年度からは資料提供を依頼した際に、企業側がリモートワークになったため担当者が出勤できない状況が生まれてしまった。その結果、資料入手が難しいという問題が起こるようになった。また、外部の研究機関に協力を依頼する際にもコロナ禍であることを考慮したため、積極的に連絡を取りづらい状況になってしまった。学生が

研究を行っていくにあたり、どこまで積極的に行動すべきなのか、あるいは行動すべきではないのかという境が不鮮明になってしまったと感じている。

今後、研究を行っていくにあたりそのような不便な点とどのようにして向き合っていけばよいのかを考え、研究機関や企業との連携をスムーズに行えるような体制を整えることが必要であると感じている。

コロナ禍だからこそ、私にも会報の執筆依頼が巡ってきた。コロナ禍における調査経験に多少なりとも価値をつけるために、この経験を会報で報告し共有できればと思う。

●COVID-19 影響下でのニカラグア調査と日本での研究活動について

深谷 岬（京都外国語大学大学院博士後期課程）

はじめに

本稿では、COVID-19 の影響を受けた 2020 年度の研究活動について報告し、学生会員の一視点を皆様と共有したいと考えている。筆者が調査の主なフィールドとしているニカラグアの様子と、自身の研究状況、研究助成金に関わる手続き、オンライン学会や講演会についての私見を述べたいと思う。

ニカラグアでの調査と COVID-19 に対する反応

全世界が COVID-19 の感染に対して危機感を覚え始めたころ、筆者はニカラグアで調査を実施していた。2020 年 3 月 2 日にニカラグアへ入国する際には、検温や移動制限などの措置はなかった。調査地はマティグアス郡ティエラ・ブランカ村と、北カリブ自治地域シウナ市近郊で、いずれも医療設備が十分とは言えない地域に位置する。地域住民との協議や聞き取り調査を実施するため、筆者らが訪問することに問題はないか予め地域住民らに確認したが、ウイルス感染を不安視している様子は無かったため、予定通り調査地を訪れた。住民が不安を感じないようにマスクの着用を検討したが、カウ

ンターパートに「みんながびっくりするからマスクはつけるな」と一笑されてしまった。その時点ではニカラグア国内で感染者が確認されていなかったこともあり、COVID-19 についての話題が出ることはほとんどなく、いつもと同じように調査を進めた。

ニカラグアでは正式な国境封鎖の発表は無かったが、隣国が相次いで封鎖措置を取るのに合わせる形で、4 月から事実上の国境封鎖となり、9 月にアビアンカ航空の航行が再開された時点で封鎖解除となった。ニカラグア保健省の発表では、2021 年 4 月時点で感染疑い 5,575 人、死者 183 人とされている¹。あくまで筆者の私見だが、ニカラグアは他の中米諸国よりも、COVID-19 に対する恐怖感や外国人の受け入れに対する抵抗が官民ともに少ないように感じる。またウイルスに対する日本とニカラグアの対応や印象の違いも大きく、それによって生じうる問題を筆者は危惧している。日本では、政府により複数都市で緊急事態宣言が発令され、移動自粛が求められているが、ワクチン接種は他国に後れを取っている。海外調査はおろか、大学や図書館などへの自由な出入りはできず、感染以前と同様の調査研究は不可能であるという考

え方は多くの研究者間で共有されているだろう。一方ニカラグアでは、入国前 96 時間以内に実施した PCR 検査の陰性証明書の提示は求められるが、入国制限はなく²、経済活動は感染拡大以前と比べ大きな変化はない。2021 年 3 月から若年層へのワクチン接種が始まっており³、学術活動は、ほぼ通常通りに戻っている。今後、日本国内の情勢に加え、医療体制の整っていない地域へウイルスを持ち込まないように調査の中止は仕方がないと日本人研究者は思うかもしれない。しかしニカラグアのカウンターパートや調査地の住民からすれば、毎年調査に来ていた日本人たちはなぜ来ないのか、もう来ないのかという疑問や不満が生じかねない。このようなすれ違いは、調査を再開する際の支障となり得るため、カウンターパートや地域住民には、日本の状況と今後の調査予定を共有し続ける必要があるだろう。現在、カウンターパートとは主に WhatsApp や Messenger などの SNS を介して連絡を取り合っている。

筆者は、エルサルバドルのタマニケ市で実施されている考古学プロジェクトにも携わっている。エルサルバドル国内で移動制限が解除された後は、カウンターパートが調査地で活動をした際の写真や地域住民への聞き取り調査の概要などを WhatsApp で送付してもらい、意見を交換している。

2020 年度の自身の研究状況

2019 年度までは、大学の夏期休暇と春期休暇に合わせて各年 2 回の海外調査を実施していたが、2020 年度は夏期と春期いずれの調査も中止した。通常であれば、日本滞在時はフィールドワークの準備とデータ整理、調査成果のまとめに研究時間の多くを割く。しかし、フィールドワークを実施することができなかった 2020 年度は関連文献の渉猟を研究の中心に置かざるを得なかった。また、海外渡航ができなかったことで生まれた余裕を利用し、植民地時代にスペイン人が書き残した文書の読解に手を伸ばした。筆者の専門は考古学であるため、指導教員の指導を受けながら文書を読み進めた。京都外国語大学がオンライン授業で使用している Microsoft Teams を使用し、1~2 週に 1 回のペ

ースで、個人ゼミ形式で指導をしていただいた。

自由に大学や図書館を利用できない中でも、インターネットを活用することで、なんとか必要な文献を入手した。特に、植民地時代文書はウェブ上に PDF 形式で公開されているものが多かったので、それを利用したり、指導教員が所有している資料を使用した。また、Academia.edu や ResearchGate などの論文投稿サイトから論文を入手することも可能であった。JSTOR のアクセス権がある大学に所属する研究者の方に論文のダウンロードをお願いすることもあった。その他、大学図書館の郵送貸し出しサービスを利用したり、オンラインで書籍を購入したり、思いつく限りの方法で文献を収集した。

また、2020 年 3 月までの調査成果をまとめたり、先行研究を見直す時間を取ることができたため、学会での口頭発表や、雑誌への論文投稿をすることができた。

研究助成金について

筆者は、2020 年度と 2021 年度に 2 つの機関から若手研究者を対象とする研究助成を受けている。COVID-19 の影響を受け、海外フィールドワークを含む研究計画の大幅な変更を余儀なくされたため、助成期間や研究内容の変更などに関する手続きが必要となった。本稿では 2 つの研究助成を助成金 A、B とし、各機関とどのようなやり取りをしたかを報告したい。

まず、2020 年度に助成を受けた助成金 A は、申請時には COVID-19 は流行していなかったため、海外調査を中心とした研究計画を提出した。2020 年 8 月時点で、年度内に海外調査を実施できず、研究を計画通りに遂行できない可能性があることを助成先機関に報告した。当初の研究助成対象期間が終了する時点で、研究の進捗状況と遅延理由についての報告書を提出し、研究期間の延長を認めてもらうための審査を受けることで助成期間の延長が認められるという返答を受けた。また、海外調査を別の方法に変更するなど研究計画の変更も認められた。最終的には 2021 年 5 月に、研究期間を 1 年延長する許可を得ることが出来た。

2021 年度に助成を受けている助成金 B は、申請時には既に世界中で COVID-19 の感染が

認められていた。そのため、感染の影響を受ける可能性のある研究方法を提示する場合、研究方法の代替案も記すよう指示されていた。採択後に、研究期間の延長は可能かを尋ねたところ、延長は認められなかったが、申請書に海外調査に代わる方法を提示していたため、助成金額は採択時から変更されることはなかった。

COVID-19 と世間の動向が読めない今、複数の研究計画を用意しておくことが、状況が好転・悪化した際に、迅速かつ効率的な研究方針の舵切りにつながると感じた。また、計画に大きな変更が生じる可能性を感じた時点で、助成先機関と早めに連絡を取る方が良いだろう。助成先機関によっては柔軟な対応策を提示してもらえる場合もあり、助成していただいた研究費も有効に活用できるかもしれない。COVID-19 流行以前に申請した助成金 A については、2020 年 4 月時点で研究計画が崩れる可能性があったにも関わらず、もしかしたら年度内に海外調査ができるかもしれないという根拠のない楽観視をしたため、助成先機関に計画変更についての連絡をしたのは 8 月に入ってからだった。4 月から 7 月にかけては、海外調査の準備と文献渉猟を中途半端に並行して時間を浪費した上、研究計画書に計上していない用途で研究費を使うことはできないので、ソフトウェアや文献の購入も遅れた。

学会・講演会のオンライン開催のメリット

発表者と聴講者が対面しての学会や講演会は開催されず、それに付随する懇親会などもなくなり、意見交換や新たな研究者間ネットワーク形成は困難になった。学会や講演会のオンライン開催により新しいツールやシステムを使わざるを得なくなった開催者側の苦労は想像に容易いが、発表者や聴講者にとっては多くのメリットがあったと考えている。

まず、開催地に左右されずに学会や講演会へ参加できる点がある。交通費や宿泊費の捻出は、大学院生をはじめとする若手研究者にとって切実な問題であった。授業や仕事との兼ね合いで参加できない場合もあった。しかし、オンライ

ン開催により、開催地が遠方であることから参加をあきらめる必要は無くなった。Facebook Live や YouTube など海外の講演会やウェビナーが多数無料で公開されるようになり、気軽に色々な講演を聞くこともできるようになった。

いわゆる僻地に住む筆者にとって、自宅に居ながらにして発表や聴講が可能になった点は大きなメリットだった。また、自宅から参加できるということは、家事・育児・介護など、様々な状況に置かれている研究者にも広く発表や聴講の機会が与えられるという点で画期的ではないだろうか。

おわりに

研究の軸であった海外調査は実質不可能となり、大学や図書館などの研究機関への訪問も難しくなり、ほとんどの研究者は COVID-19 の影響を受けて厳しい研究状況に置かれた。筆者も例外ではなく、指導教員やカウンターパート、他の研究者と気軽に意見を交わす機会がなくなること、モチベーションの維持は難しくなり、これからの自身の研究に対して大いに不安を覚えた。

そのような中、新しい研究方法を試すきっかけも得ることが出来た。植民地時代文書からは、考古学調査だけでは得ることが出来ないデータを得ることができた。さらにオンライン開催された学会や講演会に参加することで、自宅にいながら口頭発表をしたり、新しい知見を得たり、刺激を受けられるようになった。COVID-19 の影響でできなくなったことを数えればキリがないが、現在置かれている特殊な状況下で何ができるのかを考えることで、これまでとは違う角度から自身の研究を見つめなおす機会としたい。

¹ 市民団体の発表では感染疑い 14,170 人、死者 3,101 人。在ニカラグア日本国大使館 HP 参照 https://www.ni.emb-japan.go.jp/itprtop_ja/index.html (閲覧日 2021 年 6 月 1 日)

² 同参照

³ 同参照

●一般の方とオンラインを介した共同研究の可能性

上原 なつき（名桜大学）

あらゆるものがオンライン化

この一年で様々なものがオンライン化した。オンラインでの講義や会議、学会参加にはある程度慣れ、ノウハウも蓄積されてきたものの、海外での現地調査に関しては、私の場合は全く止まった状態である。これまでの調査で得られたデータの再検討や文献研究などでやり過ごし、「いつになれば調査に行けるだろうか?」とやきもきしている。おそらく、多くの研究者が同様の状況ではないだろうか。

これまでの調査でデータの蓄積があった研究者ならまだしも、まだ現地調査を実施したことがない大学院生や調査経験の少ない若手研究者のなかには、研究テーマそのものの見直しや変更を余儀なくされた方もいらっしゃると思う。

「現地調査に行けないのはどの研究者も同じなのだから、パンデミックが収束するまで大人しく文献研究に取り組もう」と考えていたが、この学会のアンケートに対して「研究者ではない一般の方とオンラインを介した共同研究をやってみたい」という思いつきをうっかり回答してしまったので、未だ実行はしていないがアイデアの共有ということでこのエッセイを読んでもらいたい。

オンラインによるフィールドワーク

私の専門は文化人類学であるが、文化人類学分野ではこのような状況だからこそ、コロナ禍の現状自体をフィールドワークするという取り組みや、オンラインで公開されているデータベースを活用した研究、オンライン空間自体をフィールドととらえる新たなフィールドワークの提案もなされている（日経新聞オンライン 2020；日本学術会議 2020）。

人類学や社会学においては、オンラインを介した調査やオンライン空間自体をフィールドとする研究はコロナ禍以前より行われていたが（木村 2018、小川 2019）、学部生や院生向けの講義やゼミにおいても、オンラインを介した

フィールドワークの取り組みが試行錯誤のなか行われているようだ。

オンデマンド型か同時双方向型か

例えば、駐大阪韓国文化院と大阪歴史博物館が共同制作した「オンラインフィールドワーク」という動画が YouTube に公開されている（駐大阪韓国文化院・大阪歴史博物館 2020）。専門家が大阪各地の調査地に赴き、説明する動画である。オンデマンド型講義と同じく、撮影された動画を画面越しの「調査者」は時間や場所に関係なく、いつでも視聴することができるオンデマンド型フィールドワークである。調査者のフィールドでの気づきやインフォーマントとの双方向的なやりとりという点ではさらに仕掛けが必要であろうが、学部生向けのフィールドワーク入門講座などであれば、動画配信によるオンデマンド型フィールドワークはもっとも取り入れやすい方法ではないだろうか。

次に、桜美林大学の「沖縄学入門」という科目において、オンライン会議システム Zoom を利用した「リモート・フィールドワーク」が実施されたそうである（名桜大学教員からの情報）。沖縄在住の専門家が、Zoom 配信のカメラを担当するアシスタントとともに沖縄の調査地を巡りながら解説やインタビューを行う、同時双方向型のリモート・フィールドワークである。画面越しに受講者と双方向のやり取りをしたり、また、地元のラジオ放送を利用して受講者が沖縄の人々に向けて発信するなど、双方向のコミュニケーションも実現したようである。

私が所属する名桜大学は沖縄県にあるが、本学学生数人もこのリモート・フィールドワークへの参加が特別に許可され、県外にいる受講者同様にオンラインで参加したそうである。合同ゼミや合同フィールドワークという方法としても興味深い。このリモート・フィールドワークでは両大学の学生同士の交流がどのように行われたかはわからないが、現地学生と遠隔の学生がオンラインを介して共にフィールドワークを

行い、お互いの気づきを共有し議論することは学びを深めるうえで有用な方法であろう。

以上の事例のように、YouTube や Zoom を利用したオンライン・フィールドワークは、インターネット環境と設備が整った調査地であれば有用な方法といえる。これまでの調査で共同研究の経験や現地の人脈があり、先方の環境と設備が整っていれば、海外の共同研究者やインフォーマントとオンラインを介したフィールドワークおよびインタビューはすぐにでも実施可能な方法である。

しかし、ペルーのアンデス農村の儀礼調査というかなりオーソドックスなフィールドワークを行っている私のような研究者には、木村 (2018) や小川 (2019) の研究のようにオンライン空間そのものをフィールドととらえることはなかなか援用が難しい。また、調査地のインターネット環境と設備、共同研究者やインフォーマントの通信料などの費用負担、時差などを考慮すると、Zoom によるフィールドワークまたはインタビューは実験的に数回程度を実施するなら可能だと思うが、長期間かけて継続的に実施するのはお互いに負担が大きいと考えられる。

現地研究者も調査が困難な状況

これまでに現地の研究者と共同研究をした経験のある方であれば、現地研究者とオンラインでの共同研究、共同フィールドワークがもっとも現実的に可能な方法である。しかし、ペルー国内においても移動制限、活動制限等があるなかで、リマなどペルー都市部在住の現地研究者が自由に地方の農村へフィールドワークに赴ける状況にはない。

そこで、調査地に住む一般の方々とは共同研究を行うのであれば、そのような制約もクリアできるのではないかと思いついた。通常のフィールドワークでもインフォーマントを介してデータを集めるのだから、インフォーマントとオンラインで連絡を取り合えばよい。すでに現地の人脈がある研究者はそれでよいが、そうでない場合は、実行は難しいと考えるかもしれない。しかし、面識がなくとも Facebook などの SNS を利用して調査地の一般の方々とはコンタクトを

取ることはそんなにハードルの高いことではない。

ただ、やみくもにコンタクトを取っても、インタビューや共同研究に適した人物とは限らない。

そこで、調査地の一般の方々の中でも特に、歴史や文化の継承などに関心のあり、Facebook や YouTube などを利用して地域の祭祀や習俗について情報発信をしている方であれば、オンラインで共同研究ができるのではないだろうか。日本においても、大学や研究機関には所属していない一般人でありながら「郷土史家」として、地元の歴史や習俗を研究している方々がいるが、ペルーのアンデス農村にもそれに似た活動をしている一般の方々がいらっしゃるのである。

アマチュアの郷土史家

私がペルーでの現地調査でこれまで出会ったアマチュアの郷土史家は、小中学校の教員、役所の公務員、エンジニアなどの専門職、宗教関係者などである。彼らは必ずしも歴史学や人類学などを専門的に学んだわけではない。それらの方々に共通している点は、1)大学などで高等教育を受けた経験がある、2)村以外の都市部での勤務経験または生活経験がある、3)公務員や専門職など安定した職を得ている、などである。

彼らは都市部での生活経験から、地元の文化の特異性や村の歴史に対する思い入れがあり、遺跡の保護や文化継承が重要だと考えている。高等教育を受けているため文章を書く能力があり、職業的立場を利用して出版へのアクセスや予算の確保も比較的容易である。また、安定した職と収入があるため、余暇を研究活動や継承活動に充てることができる。職業上、パソコン操作やインターネットの利用にも慣れており、個人的に Facebook や YouTube による情報発信をしている方も多いため、オンラインでの共同研究は十分に可能だといえる。また、彼らの SNS の投稿には同村出身者のコメントなどもあり、地域アイデンティティの創出やオンライン空間におけるコミュニティの形成などの視点から、郷土史家の活動そのものも研究対象になりうるであろう。

オンラインを介した郷土史家との出会い

たとえ現地調査の経験がなく現地との人脈がなくても、オンラインでの情報収集次第で調査地のアマチュア郷土史家を見つけ、共同研究をすることは可能である。

私の経験から一例を挙げると、オンラインでの情報収集でスペインのアマチュア郷土史家を見つけ、面識がなかったにもかかわらずメールでコンタクトを取り、実際に現地調査につながった経験がある。

当初、ペルー・アプリアマック県アンタバンプ村の死者儀礼であるアニメーロについてインターネットで調べていたところ、偶然にもスペインのムルシア州でアニメーロまたはアウロロと呼ばれる同様の死者儀礼が行われていることがわかった。ペルーのアニメーロに関する先行研究が全くなかったため、他地域でもいいので何かしらの情報を得たいと考え、偶然見つけたムルシア州のアニメーロについてさらに検索した。すると、ある一人の著者がアニメーロおよびアウロロに関する文献を複数出版していることがわかった。その著者について検索してみたところ、出版だけでなく Facebook やメールマガジンでも情報を発信していて、著者情報としてメールアドレスを公開していた。私は面識のないその方とメールでコンタクトを取り、彼の協力のおかげで 2015 年にスペインでの初調査を実現することができた。

その方もやはりアマチュアの郷土史家で、高等教育の経験、都市部での勤務経験、安定した職という 3 点が共通していた。彼は公務員で、観光と地域の工芸品を促進する州の機関に勤務していた。また、会計課にいたため出版助成などの予算を利用しやすい立場にあった。彼は人類学や民俗学を専門的に学んだわけではないが、経営学の学士号を持っていた。彼の地元は勤務先のある都心部から車で 30 分ほどなので田舎というほどではなかったが、このアニメーロまたはアウロロと呼ばれる習俗は都市部や他の州ではほとんど行われていないそうなので、地域特有の文化だと彼は自負していた。

彼の職場でワークシェアリング制度が導入されたため、以前より勤務時間が短縮され給与が減ったことを彼は嘆いていたが、それでも失業

率の高いスペインでは公務員は安定した職業のひとつであった。時短勤務で余暇が増えたので、土日だけでなく平日の夜も地元のカトリック信心会のメンバーとして、死者のために歌をささげるアウロロと呼ばれる男性合唱団の活動に参加していた。この活動による人脈を生かしてインタビューや調査を行っていた。

研究といっても学術的に分析をするわけではなく、存続の危機にあった地域の文化を次の世代に継承したい、年寄りの記憶が失われる前にインタビューして書き残したいという目的で、彼は本の出版やオンラインによる情報発信を行っていた。

彼にとって私は見ず知らずの外国人であったにもかかわらず、突然のメールによるインタビュー依頼を快く引き受けてくれた。調査中は彼の職場やアウロロの活動に連日同行させてくれただけでなく、他の地域でアニメーロやアウロロとして活動をしている方々も紹介して下さった。もちろん一概には言えないが、このような郷土史家の方々は、自身の研究活動に興味を持ってくれる人に対して好意的である、というのが私のこれまでの印象である。

研究倫理とオーサーシップの合意形成

以上のように、アンデスやスペインの調査地で複数のアマチュア郷土史家の方々と出会ってきたが、私のこれまでの研究においては、彼らはいくまでインフォーマントの一人であり、共同研究を行った経験はまだない。郷土史家のような一般の方々と共同研究を行う場合に予想される注意点は、研究方法、研究目的、研究倫理、オーサーシップなどについての合意形成ではないだろうか。一般の方とのオンラインでの共同研究を思いついたものの、私が実行を躊躇している最大の理由はこの点である。

私はフィールドワークに関する講義の中で、宮本常一・安溪遊地 (2008) の共著『調査されるという迷惑』を教材として使用するのだが、この文献のなかで、ある研究者が、一般の方が調査・記録した文章を断りもなく自分の研究成果として勝手に論文を発表したことで、調査地の方々とトラブルになった事例が描かれている。その一般の方は、自分が書いた文章や集めた資

料を貸すかわりに、文章の書き方や研究の仕方を教えてくれるようその研究者にお願いしていた。また、記録や資料は必ず返却するという約束であった。しかし、研究の仕方は教えてもらえず、アマチュア郷土史家の研究成果はプロの研究者に奪われてしまったのである（安溪2008:41-44）。

学問を体系的に学んだ経験がなく、調査方法や学術論文の書き方を知らない一般の方は、あくまでインフォーマントとして協力してもらうほうが、無難であるかもしれない。しかし、アマチュアながらも自分たちの歴史や文化を研究している郷土史家は、自らの研究活動の重要性を自負しており、現地の人々からも地元の知識人として一目置かれている場合が多い。研究者がアマチュアの郷土史家を単なるインフォーマントと扱うことは、彼らへの敬意を欠いていると批判されても仕方がないだろう。

桑山（2008）は、ネイティヴ研究者は欧米研究者から単なる物知りのインフォーマントとして扱われ、その研究が正当に評価されないという問題点を指摘している。桑山が言及しているネイティヴ研究者というのはプロの研究者のことを指しているのだから、アマチュアの研究者は想定されていない。しかし、プロ・アマ問わず、現地の研究者が単なる物知りなインフォーマントとして扱われるか、研究者として正当に扱われるかは、学問的権力のある研究者側の恣意に委ねられているということに、私たちは注意を払わねばならないだろう。

先述したように、私自身もこれまでの研究においてアマチュア郷土史家の方々をインフォーマントとして扱ってきたので、自省の意味も込めて、本稿では一般の方々とのオンラインを介した共同研究の可能性として論じた。論文の共著者として名前を連ねるのか、それとも本文中や謝辞において共同研究者として明記するのかは、共同研究の方法および共同研究者との合意形成の内容によって異なるであろう。いずれにしても現地調査ができない現状において、オンラインで活発に情報発信しているアマチュア郷土史家は、共同研究者として十分な可能性を持った存在といえるだろう。

オンラインを介した調査・研究の発展へ

以上、コロナ禍の現状を踏まえて、一般の方々のオンラインを介した共同研究の可能性について考えてきたが、パンデミックの収束以降も、オンラインを活用した研究の蓄積は進められていくべきだと考える。大学教員の場合、現地調査に行けるのは講義のない長期休暇期間に限られるので、それ以外の時期に行われる祭りや儀礼の調査に行くことは通常でも難しい。他にも、研究助成が獲得できなかった場合や、出産、育児、介護などのさまざまなライフイベントによって現地調査ができない期間が生じる場合もあるだろう。

以上のことを考えれば、オンラインを介した調査や共同研究はその場しのぎの代替手段ではなく、パンデミック収束以降も選択肢のひとつとなりうる。今後、オンラインを介した調査・研究の実例が蓄積され、様々なアイデアが共有されていくことが望まれる。

参考文献リスト

安溪遊地

2008 「される側の声：聞き書き・調査地被害」『調査されるという迷惑』（宮本常一・安溪遊地共著）pp.35-51. みずのわ出版。

小川さやか

2019 「SNS で紡がれる集合的なオートエスノグラフィ：香港のタンザニア人を事例として」『文化人類学』84(2):172-190。

木村忠正

2018 『ハイブリッド・エスノグラフィー：NC 研究の質的方法と実践』新曜社。

桑山敬己

2008 『ネイティヴ人類学と民俗学』 弘文堂。

駐大阪韓国文化院・大阪歴史博物館

2020 「オンラインフィールドワーク〈朝鮮通信使と大阪〉Ⅰ 港から町へ」(<https://www.youtube.com/watch?v=EnxmG3QJm8> 2021年5月28日閲覧)。

日本学術会議

2020 「公開シンポジウム：コロナ時代におけるフィールドワーク教育をめぐって」(<http://www.scj.go.jp/ja/event/2020/295-s-0919.html> 日本学術会議ホームページ)

2021年5月28日閲覧)。

日本経済新聞オンライン

2020 「コロナ禍のフィールドワーク：新しい調

査方法模索」(<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO64172180U0A920C2CR8000/> 2021年5月28日閲覧)。

●オープンサイエンスと海外考古学：一若手研究者の視点から

金崎 由布子（東京大学）

新型コロナウイルスの感染拡大が続くなか、フィールド調査をいつ再開できるのか、見通しが立たない状況が続いている。この一年余、現地への渡航はもとより、大学への入構制限、図書館の機能の一部停止など、研究の基盤となる資料・データへのアクセスがままならなかったことは、私自身の研究にも大きな影響を与えた。

こうしたなかで、オープンサイエンスはますます重要性を持つだろうと思われる。オープンサイエンスとは、研究者、非研究者を問わずあらゆる人々が研究成果にアクセスしたり、活動に参加したりできるようにする運動のことである（Wikipedia「オープンサイエンス」参照）。現在、学術論文等のオープンアクセスはもとより、様々なデータや、解析コードなどのメソッドについてもオープン化を進めていこうという機運が高まっている（Marwick 2020; 野口 2021）。このような動きは、海外調査を中心とした私たちの分野においても、研究の可能性を大きく広げるものと考えられる。そこで本稿では、一人の若手研究者としての実体験にもとづいて、今後どのような取り組みが必要かを私なりに考えてみたい。

私の専門はアンデス考古学であるが、学部以来東京大学の考古学研究室に所属しており、日本考古学の研究に触れる機会が多かった。ここで最も感じたのは、資料・データへのアクセス環境の違いである。当然のことながら海外考古学では、発掘調査から出土した資料の実物にアクセスするには様々な困難がある。しかし、ここで特に取り上げたいのは、調査で得られた諸種のデータ、遺構図面や土器図版等の二次資料へのアクセシビリティについてである。これらのデータは日本考古学では、公共機関や大学が発行する発掘報告書にまとめられ、紙媒体・オ

ンラインで公開されており、研究の主要なソースとなっている（参考：全国遺跡報告総覧 <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>）。一方私の調査地の場合では、政府に提出された報告書は各自治体で保管され、閲覧のためには現地に行き許可を得なければならない。またこの報告書では遺物の詳細な図版等が掲載されることは稀である。そのため、資料・データの詳細は、主として各研究者の論文・書籍の中で公開されることになるが、特に雑誌論文の場合、紙幅の制限から限られた図版しか掲載されないことが多い。

このような問題に対する解決策の一つは、論文が公開される際に、雑誌の用意するプラットフォーム（オンライン上で公開される supplemental information 等）や自分の所属機関のリポジトリを用いて補足データへのアクセスを用意することである。最近、大森貴之氏、鶴見英成氏と共著で出版した雑誌論文では、本文中に示す図表のほか、補足資料として、対象エリアから出土した約 200 点の土器実測図、カーボンサンプル全点の写真、解析に用いた OxCal のコード等を公開した（Kanazaki et al. 2021）。このようなかたちでデータ・メソッドを公開したのは、内容の検証可能性をできる限り担保するとともに、これらを他の研究者に資料として積極的に活用してほしいと望んだためである。上に挙げたような方法によるデータ・メソッドの公開は比較的容易に行うことができるため、論文に関するより詳細なデータを研究者同士が相互に共有しあい、それぞれの研究を深めていくことが可能となる。

一方、このような論文公開に際してのオープンデータと比較して、発掘報告書をはじめとした様々な資料・データを包摂するデジタルアー

カイブの構築には、より高いハードルがある。まず、様々な人々にとって利用可能なかたちで長期的にデータを蓄積するためには、大規模なプラットフォームの構築が必要となる。これは各国において行政機関等が主導して行なっているものであり、外国人調査者である私たちがどのように貢献できるかを考えなければならないだろう（2021年6月に公開された *Internet Archaeology* 考古学デジタルアーカイブ特集号では、各国の取り組みが紹介されている <https://internetarch.ac.uk/journal/issue58/index.html>）。

また、アカデミックキャリアやピアレビューにおける現状の評価基準が、オープンアーカイブの構築への舵切りをためらわせているという一面も無視できないように思う。例えば、現状においてデータの“初出性”は査読の中での重要な要素の一つであり、このことが各研究者のデータ公開の方法やタイミングの判断に大きな影響を与えているだろう。また特に若手研究者にとって、研究資金の獲得、論文執筆、就職活動のサイクルの中で、研究業績は常に差し迫った問題であり、アーカイブ構築や情報発信に力を注ぐよりも、より評価に直結しそうな雑誌への投稿をどうしても優先的に考えてしまいがちになる。

そのため、オープンサイエンスの推進のためには、研究成果に対するより多角的な評価基準が必要とされるだろう。そこには、狭い意味での研究の新規性・独創性の評価だけでなく、将来的な利用のためのデータ・メソッドのアーカイブや情報発信を学術的な成果として積極的に評価する枠組みが含まれるべきである。また、アーカイブの構築は競争的に行うような性格のものではなく、アイデアや試行段階で公開し、レビューしあうことができる。論文や書籍のかたちの最終成果物だけでなく、過程段階での様々な学術コミュニケーションや中間生産物をどのようにしてシステムの中に組み込んでいく

のかということが重要ではないかと思う。

オープンアクセス、オープンデータ、オープンメソッドロジーの流れは、今回のような大規模な災禍での研究継続を可能にするというだけでなく、市民による研究参入を容易にする、育児・介護等により限られた時間の中での研究を可能にする、一次資料にアクセスしづらい学生でも早くから自身の研究を推進・発表できるようになるなど、研究の裾野を広げるものであることは間違いない。また、論文の中では公開されない、現場・ラボで記録された様々な情報の中に、新たな研究の領域を拓く手がかりが含まれているようにも思う。一人の若手研究者として、海外考古学におけるオープンサイエンスの推進のために何をしていくべきなのか、今後も継続して考えていきたい。

参考文献

Kanezaki, Yuko, Takayuki Omori, and Eisei Tsurumi

2021 Emergence and Development of Pottery in the Andean Early Formative Period: New Insights from an Improved Wairajirca Pottery Chronology at the Jancao Site in the Huánuco Region, Peru. *Latin American Antiquity* 32(2):239-54.

Marwick, Ben

2020 「文化財情報のオープン化・ネットワーク化 [1] 考古学における研究成果公開の動向 —データ管理・方法の透明性・再現性—」 『奈良文化財研究所研究報告』第24冊、pp.1-13。

野口淳

2021 「考古学・埋蔵文化情報のオープン化」 日本考古学協会第87回総会セッション5 「オープンサイエンス時代の考古学・埋蔵文化財情報」 発表資料。

●オンライン・アンケートの集計結果

千葉裕太・五木田まきは（会報編集委員）

はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大により、様々な分野が多大な影響を受けています。1年以上のウィズ・コロナ時代を経験し、本学会会員の活動状況がどのように変化しつつあるか、これからどのような取り組みが求められているかの情報を改めて共有するため、アンケートを実施しました。以下では、その結果を報告します。

オンライン・アンケート概要

「新型コロナウイルス感染症の研究活動への影響についてのアンケート」

期間：2021年2月25日～3月15日（18日間）

設問数：選択内容により12～18問

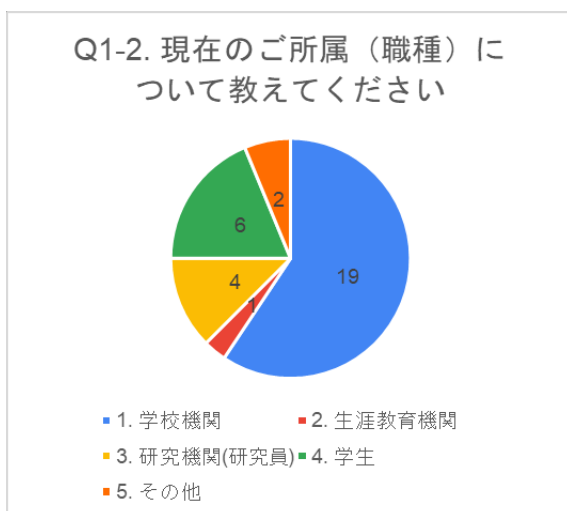
実施方法：Google Formを用いたアンケート作成。学会事務局より回答用リンクのメール配布

回答者数：32名

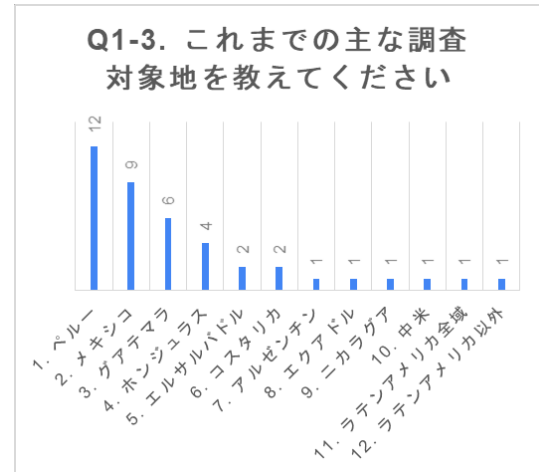
Q1-1. 氏名

[省略]

Q1-2. 回答者の所属(職種)



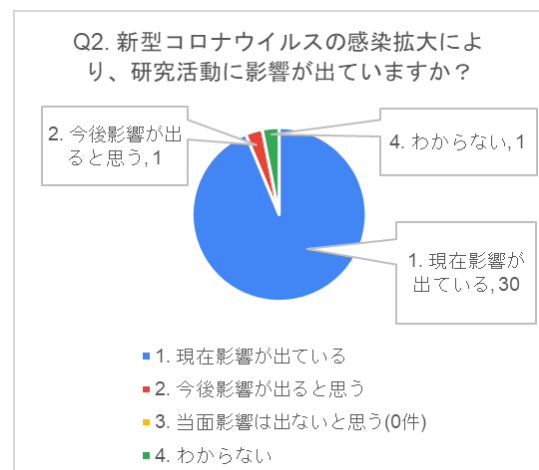
Q1-3. 回答者のこれまでの主な調査地



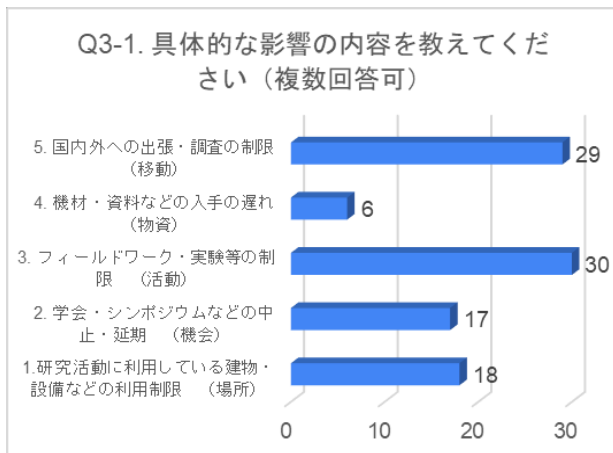
Q1-4. 2020年度の主な調査地



Q2. 新型コロナウイルスの感染拡大による研究活動への影響の有無



Q3-1. 影響の内容 (Q2. で 1. または 2. の回答者)



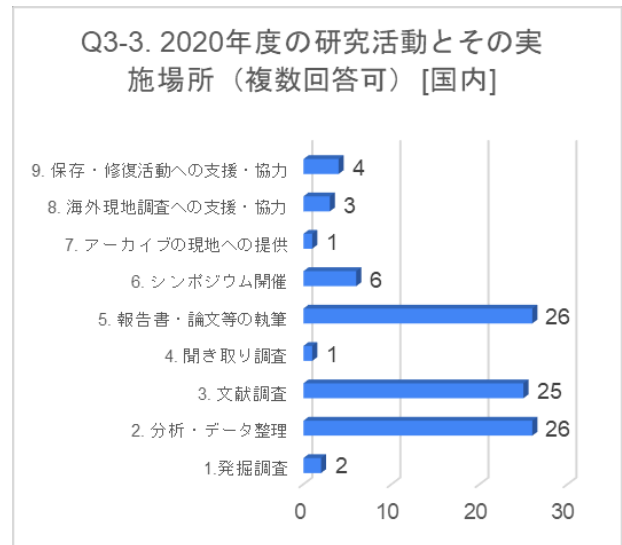
Q3-1. その他の影響

- ・出張が制限されたことにより現地調査ができない
- ・オンライン化に伴う授業準備時間の増加による研究時間の圧迫
- ・分析のための遺物の輸出手続きが不可能となっている

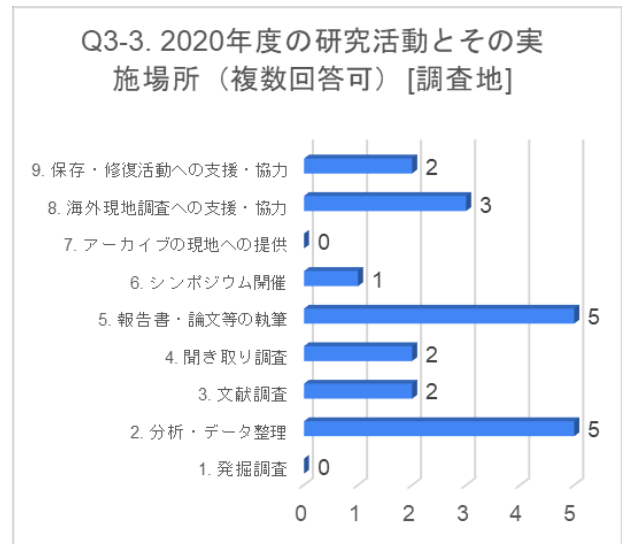
Q3-2. 上記の影響への対策

- ・国内でできる活動
- ・資料整理・過去の調査のデータ整理
- ・報告書・論文執筆
- ・文献研究
- ・リモートミーティング
- ・イベントのオンライン参加
- ・リモート発掘
- ・オンラインでできる研究活動の模索
- ・現地協力者に依頼
- ・研究方法の変更
- ・研究方法は変えずにフィールドを国内に変更
- ・早めの資材発注
- ・時期を絞ってフィールドワーク・出張
- ・調査延期・資金繰り越し
- ・新しい調査の取りやめ
- ・個人でできる対策はない
- ・待つしかない

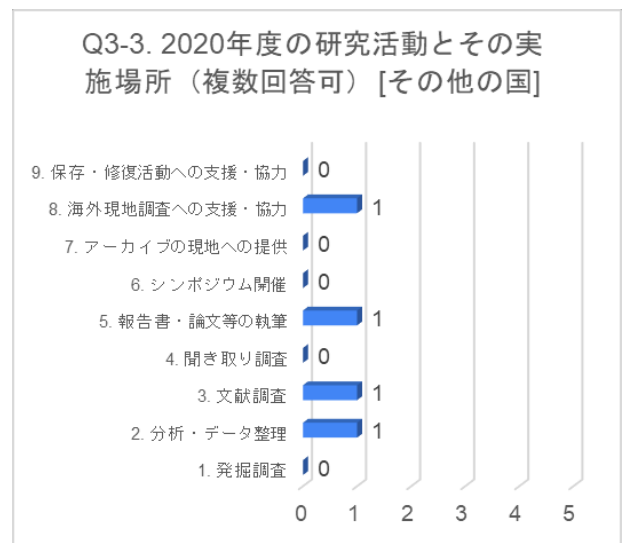
Q3-3. 研究活動の実施場所 [国内]



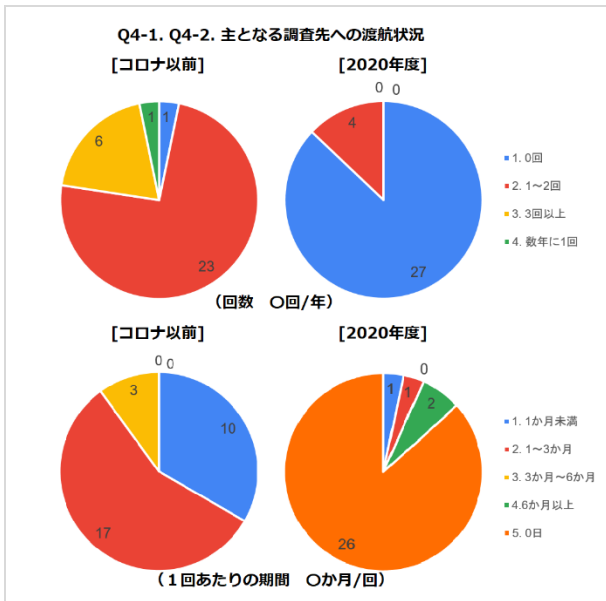
Q3-3. 研究活動の実施場所 [調査地]



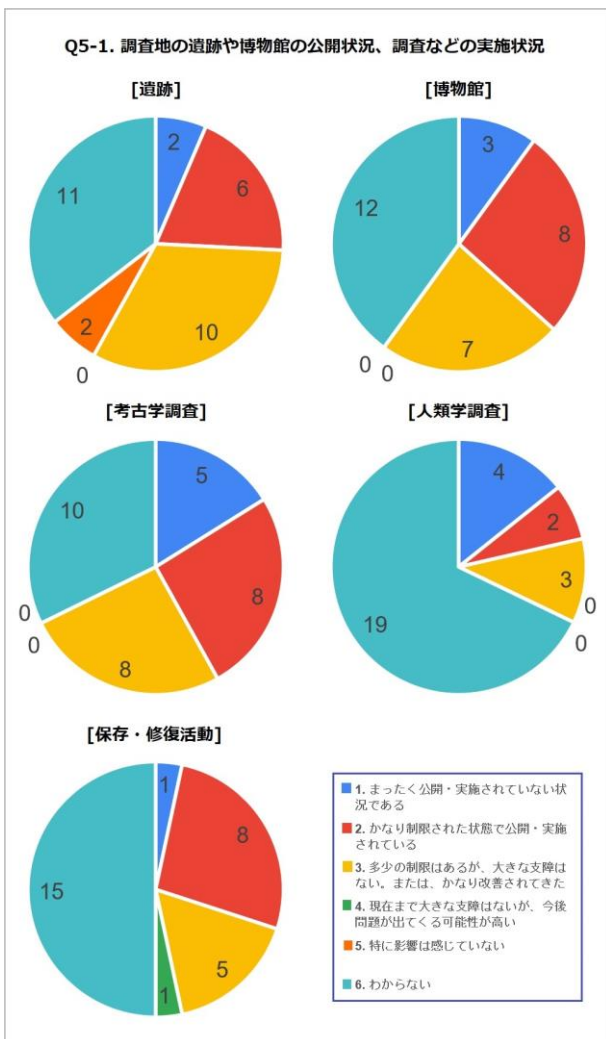
Q3-3. 研究活動の実施場所 [調査地]



Q4-1, Q4-2. 調査先への渡航状況



Q5-1. 調査地の状況



Q5-2. 調査地の状況の補足

- ・現地の行政主体の考古学調査は、コロナの状況に応じて実施されたりストップしたりが続いている状況だと聞いています[ペルー]
- ・博物館がオンラインで代表的な展示物の解説を配信している[ペルー]
- ・条件を整理しての発掘調査などの試みもあるが、最近のロックダウンで調査はまた難しくなったようだ[ペルー]
- ・公開にあたってのガイドラインが設定され、一部の遺跡は公開。しかし非常事態宣言が度々出ており、その都度公開が中止になっている。博物館も同様だが、より閉鎖的な空間であるため、閉館しているケースがほとんど[ペルー]
- ・2020年3月に渡航自粛で事実上、発掘調査が中断となりました。また2020年度は大学による海外調査の制限もあり、コロナ禍で海外調査が実施できない状況にあります。遺跡は私有地にあり、コロナにかかわらず基本的に公開はされていません[メキシコ]
- ・調査地は遺跡の一般公開はされていないし、遺跡にはまだ博物館はない。しかし、遺跡を訪問することは可能であり（基本的には私有地なので所有者が許可すれば遺跡に入るとは可能である）、遺跡上に位置する村に保管されている石彫を見ることも可能である。考古学調査をすることは可能であると考えられるが、実際には学術調査が行われているという情報は得ていない。現在行われている調査はほとんどが緊急調査だけだと思われる。これはINAHが許可を出していないのか、それとも、研究者の所属する研究機関が調査に出ることを禁止しているのか定かではない[メキシコ]
- ・遺跡は現地の人々の共有地であるため、状況は以前と変化はないと思います[メキシコ]
- ・ほぼ閉鎖[メキシコ]
- ・遺跡公園は一時期封鎖された[メキシコ]
- ・渡航そのものが制限されており、現在の状況は不明。少なくとも2020年度半ばまでは遺跡公園自体が機能していなかった[グアテマラ]
- ・中米各国で対応が異なる。例えばニカラグアではコロナ以前と大きく変化していない。

Q5-3. 現地での活動へのかかわり方（現在）

- ・ 現地のスタッフとオンラインでの情報交換
- ・ オンラインで発掘調査準備の打ち合わせ
- ・ 遺物整理や分析、復元、修復、報告などリモートで実施可能な調査や研究活動を、現地の協力者と連携して実施
- ・ オンラインでのシンポジウム開催
- ・ 現地への物資の支援活動を計画
- ・ 論文執筆や報告書により現地とかかわり
- ・ オンラインでの学生指導（現地の学生の論文指導）
- ・ 保存関係のプロジェクトは一部実施
- ・ パブリック考古学的な調査と研究のため大きな問題はないが、計画の変更や遅れは発生。現地の人々と協力して活動を継続。
- ・ リモートでの聞き取り。

Q5-3. 現地での活動へのかかわり方（今後）

- ・ 新型コロナウイルスのワクチンが現地で広範に投与されれば現地調査再開予定
- ・ パンデミックの終息または状況改善を期待して来年以降の発掘を計画中
- ・ 現地の人々は調査の再開を望んでいる。その期待にこたえたい
- ・ 渡航制限が緩和され次第、また現地の許可が下り次第再開したい
- ・ 発掘の委託を予定
- ・ オンラインでのシンポジウム開催を検討中
- ・ 普通のサラリーマンなので退職まで現地調査は難しい
- ・ 現地調査はコロナに関わらずいったん引き上げる予定だった
- ・ 今後については不透明
- ・ わからない、とくになし

Q6-1. ウィズ・コロナ時代の研究生活がプラスに働いた点

- ・ リモート系の知識・スキルの習得
- ・ 物理的な距離や交通費という障害が減少
- ・ オンライン・ミーティングによる時間節約
- ・ これまでの研究データの整理や、資料を分析する時間の確保
- ・ 文献渉猟の時間が増えた
- ・ 執筆活動のための時間の確保
- ・ 自宅から参加できるウェビナー等の増加
- ・ 睡眠時間の増加
- ・ 自宅時間が増え、落ち着いて作業できた
- ・ 研究の幅が広がった（研究対象・地域・人脈）
- ・ 論文等の無料公開
- ・ 不要な飲み会がなくなった
- ・ 不要な移動が減った

Q6-2. ウィズ・コロナ/アフター・コロナの時代だからこそやってみたい活動、研究手法

- ・ オンライン勉強会、シンポジウム等の開催
- ・ オンライン勉強会、シンポジウム等の参加
- ・ 議論の場だけでなく発信型のイベントの実施
- ・ 研究者ではない一般人とのオンラインを介した共同研究
- ・ これまで興味はあったが本格化させることができなかった研究の推進
- ・ 新しく始めた研究を取り入れた授業
- ・ 博物館ホームページの比較分析
- ・ 有効なバーチャル空間利用の模索と普及活動の充実
- ・ 資料を長時間借り出しての分析
- ・ 国内での理化学分析
- ・ 学術書の出版、論文や一般向け書籍の執筆
- ・ 3D データを用いた空間分析
- ・ 来年度に計画している発掘調査
- ・ 現地調査をしながらリモート授業
- ・ ウィズ・コロナで感染症対策を十分に取りながら調査を続行
- ・ いわゆるアフター・コロナあり得ない
- ・ 検討中
- ・ とくになし

Q6-3. これからの研究のあり方はどのように変わっていくべき/変わらないべきか

[変わっていくべき]

- ・打ち合わせ、意見交換、議論はオンラインに変わる、または併用され続けるべき。それにより必要な時間と経費を調整できるようになり研究に関わる間口が広がる。資金が無くても日本の研究を海外にアピールする機会が増える
- ・調査データのデジタルアーカイブ化や論文のオープンアクセス化など、場所を選ばない研究の可能性が広がるべき
- ・普及活動などはテクノロジーを利用した方法への移行など変化すべきこともある
- ・現地に足を運べない人にも活動の場が広がるようになるべき。それにより研究活動に参加できる人が増え、学界のすそ野が広がる
- ・オンライン授業などにより調査地に滞在し続けることが可能になり、現地で研究をつづけながらお金を得るといように海外調査をしやすくなっていくべき
- ・フィールドワークが可能になるまでに、これまで築盛されたデータを整理するべき
- ・デジタル化、リモート指示、オンライン会議の導入などを通して一定の調査研究ができるようになるべき
- ・本や文書の電子化（電子公開）が進むべき
- ・1回1回のフィールドワークの機会を重要とし、できるだけ長期の滞在期間となる研究
- ・現地の研究者や協力者に情報収集してもらう共同研究

[変わらないべき]

- ・考古学においてフィールドワークという手法はかわらない
- ・モノに触れない考古学に大きな価値はないので変わらないべき
- ・現地で得られる情報や築かれるコミュニケーションは大切に続けるべき
- ・人命、健康が第一
- ・なるべくこれまで通りの対面の研究活動

おわりに

今回のアンケートでは最後の質問として、当学会や学会会報に期待することについてもご意見を頂きました。「各国・各地域の現状を情報共有する場として機能してほしい」「これまで行われていた活動を可能な限り維持してほしい」「年に一回の研究大会だけでなく頻繁にオンラインの研究会を開いて会員相互の親睦の機会を増やしてほしい」「役員会等諸会議のオンライン化による支出削減」など、様々なご意見を頂きました。とくに多かったご意見は「コロナが落ち着いても研究会などはオンライン（もしくはハイブリッド）を維持してほしい」というご意見でした。

今回は「やはりコロナ下での他の研究者の研究動向が気になるので、注目すべきコロナ下での取組等を紹介してほしい」というご意見から特集を組むことを決め、7名の方に記事をご執筆いただきました。また「学部生や修士・博士課程の若い会員、専門家ではない一般会員の方の動向や興味について掘り下げた記事を取り上げてほしい」というご意見から、7名の内2名は学生会員の方にご執筆いただいた。ご執筆いただいた会員の方々、また、アンケートにお答えいただいた会員の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

また最後の質問では「研究を志望する学生に、研究を断念させないような仕組みを考えてほしい。高校生向きオンライン講座など」というご意見もいただきました。この後に続く寄稿文では、他の学会における中高生向けの活動について紹介されております。また、「高等学校教育のための授業案作成ワーキンググループ」からも、記事をご寄稿いただきました。ぜひ、あわせてお読みください。

●中高生向けの活動について—他学会の事例より—

五木田 まきは（東京文化財研究所）

はじめに

古代アメリカ学会の会員数は、2021年7月時点で148名（うち学生会員22名）であり、2008年の175名をピークに減少傾向にある。会員数の減少は学会運営のみならず、古代アメリカ研究の将来を担う次世代の育成という点においても大きな課題である。会報46号の参考のため実施した、コロナ禍における研究活動に関するアンケートにおいて、今後の学会に期待することとして、中高生など若い世代への普及活動についての意見があがった。広報的役割も期待されている会報担当として何ができるかを考え、他学会の活動に参考になるものがあるのではと思い至った。

筆者が所属する東京文化財研究所には、アジアを筆頭に世界の広い地域を対象とする研究者が在籍している。今回は、東京文化財研究所主任研究員であり、日本西アジア考古学会企画委員長を務めている安倍雅史氏に情報提供を受け、日本西アジア考古学会が一般向けに実施している活動について紹介したい。

トップランナーズセミナー

トップランナーズセミナーは、西アジア考古学を学ぶ大学院生の減少、それに伴う若手研究者不足を問題意識として、中学生、高校生、大学生といった若い世代に西アジア考古学の魅力を伝えることを目的に企画された。この背景には、2017年度に告示された「学習指導要領」の改訂がある。この改訂では、必修科目「世界史A」が廃止され、主に18世紀以降の日本と世界の近現代史を学ぶ「歴史総合」が新設される。これにより、古代オリエント史に触れる機会が少なくなり、結果的に西アジア考古学分野の進学者の減少につながる可能性がある。こうした状況を危惧し、日本西アジア考古学会では研究の第一線で活躍する研究者（トップランナー）と学生との交流の場として、2017年よりトップランナーズセミナーを開催している。

セミナーは2名の研究者による講演と、講演者を囲んだ茶話会の二部構成からなる。講演では最新の研究成果に加え、考古学との出会いから現在に至るまでの自身の研究の歩みについても語られる（写真1）。講演後には、講演者と学生がざっくばらんに語り合う茶話会を実施している（写真2）。学生から寄せられる質問は進路に関してなど具体的なものが多い傾向がある。



写真1：トップランナーズセミナー講演
（日本西アジア考古学会提供）



写真2：トップランナーズセミナー茶話会
（日本西アジア考古学会提供）

2017年2月の第1回開催以降、毎年度開催しており2021年までに以下の通り5回のセミナーを重ねている。（講師の所属は当時）

第1回 2017年2月5日（日）

会場：黒田記念館

講師：河合望（金沢大学）

門脇誠二（名古屋大学）

参加者：計73名（内、大学院生以下25名）

第2回 2017年11月26日(日)
会場：池袋サンシャインシティ文化会館
講師：長谷川修一(立教大学)
前田修(筑波大学)
参加者：計75名(内、大学院生以下13名)

第3回 2019年2月17日(日)
会場：池袋サンシャインシティ文化会館
講師：安倍雅史(東京文化財研究所)
上杉彰紀(関西大学)
参加者：計99名(内、大学院生以下27名)

第4回 2020年2月24日(月・祝)
会場：池袋サンシャインシティ文化会館
講師：増渕麻里耶(京都造形芸術大学)
和田浩一郎(國學院大學)
参加者：計78名(内、大学院生以下33名)

第5回 2021年1月11日(月・祝)
会場：Zoomライブ配信
講師：久米正吾(東京藝術大学)
馬場匡浩(早稲田大学)
参加者：計109名(内、大学院生以下40名)

第1回目は上野の黒田記念館を会場とし、第2回目からは、「地域の核となる美術館・博物館支援事業」等文化庁の支援を受け、古代オリエント博物館との共催という形で、池袋のサンシャイン文化会館を会場に博物館の入館料の免除、西アジア考古学会会員の当該館研究員による参加者を対象にしたギャラリー・トークの実施(写真3)、参加学生への小冊子の配布といったコンテンツの充実が図られた。

第4回では講演後の茶話会とギャラリー・トークの中止、第5回は当初池袋会場とZoom配信を併用する予定だったがZoom配信のみへと変更するなど、新型コロナウイルス感染症拡大の影響も受けている。しかし、これまで地理的に参加を見合わせていたであろう遠方の学生も参加しやすいなど、オンラインのメリットがあることも確かである。今後も双方の利点を活かしてセミナーを継続する予定である。



写真3：ギャラリー・トーク
(日本西アジア考古学会提供)

パイオニア・セミナー

日本人による本格的な西アジア考古学研究は、1956年の東京大学の江上波夫先生によるイラク・イラン遺跡調査を嚆矢とする。そうした先達たちの調査団で経験を積んだ若い研究者達が育ち、65年を経た2021年では20を超える日本の調査団が西アジア各地で活動している。

「パイオニア・セミナー：西アジア考古学を切り開いてきた開拓者たち」は、西アジアとその周辺地域で考古学研究を切り開いてきた第一世代の研究者(パイオニア)に、自身の研究や黎明期の様子について、フィールドを開拓してきた苦労話を交えて存分に語ってもらおうと企画された(写真4)。



写真4：パイオニア・セミナー講演
(日本西アジア考古学会提供)

2018年12月の第1回開催以降、毎年度開催しており2021年までに以下の通り4回のセミナーを重ねている。

第1回 2018年12月2日(日)
会場：池袋サンシャインシティ文化会館
講師：赤澤威(国際日本文化研究センター、高知工科大学名誉教授)

演題：「51年前のパルミラ」
参加者：計 101 名

第 2 回 2019 年 12 月 14 日（土）
会場：池袋サンシャインシティ文化会館
講師：吉村作治（東日本国際大学学長）
演題：「エジプト発掘 50 年」
参加者：計 138 名

第 3 回 2021 年 3 月 6 日（土）
会場：Zoom ライブ配信
講師：大村幸弘（アナトリア考古学研究所所長）
演題：「トルコで一万年の歴史を掘る—アナトリア考古学研究所の活動—」
参加者：計 278 名

第 4 回 2021 年 6 月 12 日（土）
会場：Zoom ライブ配信
講師：松本健（国士舘大学名誉教授）
演題：「私のメソポタミア考古学」
参加者：計 126 名

現役の若手研究者と高校生などの若い世代との交流に重点を置いたトップランナーズセミナーとはやや異なり、パイオニア・セミナーは第一世代の研究の足跡の記録という意味合いが大きい。講演内容は記録され、一冊の本にまとめられる予定である。

両セミナー開催にあたり、運営を担当する西アジア考古学会企画委員会は、考古学や歴史学のクラブを持つ首都圏の高校へのポスター送付、読売新聞中高生新聞への案内掲載など、入念な広報を行っている。2021 年からは、イベント管理サービス Peatix を活用した参加申し込み体制をとるようになった。Peatix では、イベントに「文芸／思想／哲学」「アジア」「歴史」など、カテゴリーやキーワードを設定することができる。ユーザーもそうしたカテゴリー検索を行うため、類似のイベントに関心のあるより多くの人の目に届くといった利点がある。

2017 年より計 9 回のセミナーを実施したが、第 1 回トップランナーズセミナーに参加し、その後西アジア考古学分野の大学院に進学する学

生が現れるなど、成果が見え始めている。

SNS の活用

その他の取り組みとして、学会公式 Facebook や YouTube チャンネル開設など、SNS を活用した情報発信も積極的に行っている。学会会員数 241 名に対し、Facebook のフォロワー数 1226、YouTube チャンネル登録者数は 656、Peatix フォロワー数 556（2021 年 7 月現在）と、学会外の一般の人々に向けても発信できていることもうかがえる。

おわりに

研究者だけでなく広く一般に向けた活動として、2 種類のセミナーの開催や様々な SNS の活用など、積極的な情報発信を行っている日本西アジア考古学会の取り組みを紹介した。中でも、中高生・大学生などこれから進路を考えていく若い世代をメインターゲットとしたトップランナーズセミナーは特に意義深いと感じた。海外旅行が大衆化し、様々なメディアを通じて海外の情報を瞬時に得られる現代においても、海外考古学を学ぶ、さらには海外で考古学調査を行う研究者になるといったことが、どれほど実感をもった進路の選択肢になるだろうか。筆者も幼少期からエジプトやマヤといった古代文明に対して興味を持っていたが、実際に進路としての具体的なイメージを持てたのは、高校でエジプト考古学を大学院で学んだ世界史の先生に出会ったことが大きい。そうした意味で、実際に海外で活動をしている研究者に直接会うことは、海外考古学を研究するというのをテレビの向こうの話ではなく、実感を持った経験となるだろう。

現代の中高生の情報収集行動における SNS の比重は高い。リクルート進学総研が 2020 年に行った高校生の進路選択に関する調査では、高校 2 年生の今後利用したい進路に関する情報収集行動として、「キャンパスへ直接行くオープンキャンパス」に次いで「SNS やブログでの情報」のポイントが高いという結果が示されている。こうした状況も踏まえた情報発信が今後はより重要になってくるのだろう。

●高等学校「歴史総合」の教科書に見られる古代アメリカの記述

多々良 穰（東北学院榴ヶ岡高等学校）

2022年度から高校で始まる「歴史総合」の教科書の見本本が、2021年5月に入り続々と勤務校に届いている。「歴史総合」の教科書は、東京書籍、実教出版、清水書院、帝国書院、山川出版社、第一学習社、明成社の7社12冊である（表1）。

発行	記号・番号	書名	予定価
東京書籍	歴総 701	新選歴史総合	732
	歴総 702	詳解歴史総合	732
実教出版	歴総 703	詳述歴史総合	732
	歴総 704	歴史総合	732
清水書院	歴総 705	私たちの歴史総合	732
帝国書院	歴総 706	明解 歴史総合	732
	歴総 707	歴史総合 近代から現代へ	732
山川出版社	歴総 708	現代の歴史総合 みる・読みとく・考える	732
	歴総 709	わたしたちの歴史 日本から世界へ	732
第一学習社	歴総 710	高等学校 歴史総合	732
	歴総 711	高等学校 新歴史総合 過去との対話、つなく未来	732
明成社	歴総 712	私たちの歴史総合	732

表1 教科書「歴史総合」一覧

平成30年告示の学習指導要領において、「歴史総合」の目標は次のように定められている。

(1) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、世界とその中の日本を広く相互的な視野から捉え、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解するとともに、諸資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

(2) 近現代の歴史の変化に関わる事象の意味や意義、特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。

(3) 近現代の歴史の変化に関わる諸事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される日本国民としての自覚、我が国の歴史に対する愛情、他国や他国の文化

を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

このように、いずれも「近現代の歴史の変化に関わる事象」となっており、そこに示されている大項目は、A「歴史の扉」、B「近代化と私たち」、C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」、D「グローバル化と私たち」である。特に「近代化」については、同解説を見ると「近代化では、近代化の前の各地域の状況（例えば、アジアを舞台とする日本と世界の商業や交易など）について触れ、導入とし、産業社会と国民国家の形成を背景として人々の生活や社会の在り方が変化したことを扱い」となっている。

したがって、各教科書の見本本を見る前から、今回の「歴史総合」の教科書では、古代アメリカに関する記述が、皆無かもしくは簡単な紹介程度になることは容易に予想できた。そして、もし扱われるとすれば、学習指導要領の「内容の取扱い」にあるように、中学校までの学習との連続性に留意して諸事象を取り上げるか、近世（前近代）と近代のつながりに関する事象において、古代アメリカ文明が言及される可能性があったに過ぎなかった。

以上のことを前提に、実際の教科書にある古代アメリカに関連する記述を見てみた。記述内容は以下に列挙する。なお、下線部と（ ）は、今後修正した方がよい点である。

東京書籍

『新選歴史総合』のみに、ラテンアメリカの記述が見られる。第2章「近代化と私たち」の2節「結び付く世界と日本の開国」では、「前近代の世界」として6項目あるが、そのうち「世界をめぐる銀の流れ」に関連して「歴史の舞台」の「ラテンアメリカ」として1ページ割かれている。

アメリカ大陸には、いまから1万5000年ほど前に、ユーラシアからモンゴロイド系の

人々が（陸続きだった）ベーリング海峡をわたって移り住み、各地の自然環境に適応しながら定着した。ヨーロッパ人は彼らをインディオ（インディアン）とよんだ。彼らは、前2000年代までにトウモロコシなどを栽培する農耕生活に入り、ほかにもジャガイモ、インゲンマメ、トマト、カボチャ、カカオ豆などが栽培され、のちに世界各地に伝えられた。

中央アメリカのユカタン半島では、前10世紀以降にはマヤ文明が成立し、ピラミッド状の建造物、文字、暦法などが発達した。メキシコ高原では、やはりピラミッド状の建築と文字を特徴とするアステカ王国が14世紀ごろから栄え、メキシコ湾から太平洋岸に達する強大な国となった。

アンデス高地では、15世紀初頭にインカ帝国が繁栄し、現在のコロンビアからチリにまたがる地域を支配した。石造建築と灌漑農業を発展させたインカの人々は、文字のかわりにキープ（結縄）によって情報を伝えていた。

写真：マヤの「暦のピラミッド」（メキシコ）
アルパカとリヤマ（ペルー、マチュピチュ）

実教出版

『詳述歴史総合』では、第1編「近代化と私たち」の第1章「近代化への胎動」において、ラテンアメリカの記述が見られる。INTRODUCTION「17世紀以前のアジアの繁栄とヨーロッパの海外進出」の「ヨーロッパの大航海時代」と「銀の流通」という項目で記述されている。

アメリカ大陸では、数百人のスペイン人征服者が軍事的優位を背景に、内乱に乗じてインカ・アステカなどの文明を滅ぼしたが、その決定的な要因はヨーロッパからもちこまれた疫病にあった。インフルエンザなどの何種類もの病原菌が伝播し、抗体をもたない先住民は壊滅に追いやられた。

スペインは、アジアとの交易拡大を望み、その対価としてアメリカ大陸で産出される銀を必要としたため、征服された先住民を酷使して銀山が開発された。

スペインは、メキシコ各地や南米ポトシなどの銀山を開発したため、大量の銀がヨーロッパに流入した。さらにアメリカ大陸で採掘された銀（メキシコ銀）は、メキシコのアカプルコからフィリピンのマニラに運ばれ、中国の絹や陶磁器と交換され、莫大な利益をうんだ（アカプルコ貿易）。こうしてメキシコ銀がヨーロッパ経由で、またマニラを窓口にして東アジアや東南アジアに流入していった。

『歴史総合』でも、同じく第1編「近代化と私たち」の第1章「近代化への胎動」において、ラテンアメリカの記述が見られる。歴史のひろば①「17世紀以前のアジアの繁栄とヨーロッパの海外進出」の「ヨーロッパの海外進出」という項目では、次のように記されている。

アメリカ大陸へと進出したスペインは、インカ・アステカなどの古代アメリカ文明を滅ぼし、銀山の開発に成功した。アメリカ大陸で採掘された大量の銀はヨーロッパに運ばれ、物価の大幅な上昇をひきおこした（価格革命）。またスペインはメキシコから銀をフィリピンのマニラにも運び、中国で絹や陶磁器と交換することで利益をあげた。

なお、2冊とも、「アメリカ大陸の銀山」で先住民たちの過酷な労働を紹介している。

帝国書院

『明解歴史総合』の巻頭資料の「地域の歩み」で、南北アメリカの文明を扱っている。

◇南北アメリカの文明

アジアからアメリカ大陸へ渡った人々は約1万年前に南米大陸の南端辺りまで広がり、やがて独自の文化と文明を発展させた。とうもろこしやじゃがいもなどを栽培する農耕文化が栄えたのは、メキシコと中央アメリカ・アンデス地方で、ほかの地域では、狩猟・採集を主とする部族社会が形成されていた。

メキシコと中央アメリカの文明は、メソ

アメリカ文明と総称される。メキシコ湾岸には紀元前 1200 年ごろまでに、ピラミッド型神殿や巨石人頭像を特徴とする文明が生まれ、その後の中央アメリカの諸文明に影響を与えた。ユカタン半島に成立したマヤ文明でも、ピラミッド状建造物やマヤ文字で飾られた石造建築が多数建築された。14 世紀になると、テノチティトラン（現在のメキシコシティ）を都とするアステカ王国が急速に領土を拡大した。焼畑や大規模な灌漑農業が営まれ、テノチティトランでは、周囲の湖上に泥土や水草を積み上げ、耕地が造られた。アステカ文明もピラミッド状の神殿を建造し絵文字（絵文字だけではない）を使用した。

アンデス文明地域では、15 世紀にペルーのクスコを中心にインカ帝国が支配を広げ、アンデス地方を統一した。優れた石造建築技術を用いて神殿や灌漑施設を持つ畑などが造られ、太陽を崇拜し、太陽の子と見なされる皇帝の下で社会統合も進んだ。

◇ヨーロッパ人による植民地化

コロンブスの到達後、スペインは南北アメリカ大陸に軍隊を送り込み、コルテスがアステカ王国を、ピサロがインカ帝国をそれぞれ滅ぼした。征服者は、ポトシ銀山などの鉱山や、ヨーロッパ人が経営する農園で、スペイン王国の許可を得て先住民を酷使した。先住民の殺害や奴隷化を告発したラス＝カサスらの聖職者もいたが、ヨーロッパ人が天然痘・はしか・ペストなどの疫病を持ち込んだこともあり、先住民の人口は激減した。また、先住民・黒人のカトリックへの改宗も進められた。

写真：マチュピチュ遺跡

テノチティトランの想像図

クスコの石積み

山川出版社

『わたしたちの歴史』のみに、ラテンアメリカの記述が見られる。巻頭資料「歴史の舞台」で「アメリカ大陸」が 1 ページ割かれている。

アメリカ大陸の歴史

北アメリカでは、狩猟と採集を主とした生活が営まれ、中央アメリカや南アメリカのアンデス高地（高地だけではない）では農耕文化が広がった。

前 1000 年頃、中央アメリカにはマヤ文明が成立し、石造（土製もある）の神殿・絵文字（絵文字だけではない）・ピラミッド状の建築物、精密な暦法などをもつ高度な文明が築かれた。14 世紀には、現在のメキシコにアステカ王国が建国され、都には多くの人々が住んだ。15 世紀半ばには、南アメリカのアンデス高地にインカ帝国が成立し、皇帝は太陽の化身（太陽の子の誤り）として崇拜された。インカ帝国には文字はなく、ロープの結び目を用いるキープという伝達手段が用いられた。

1492 年、コロンブスが西インド諸島に到達したことをきっかけに、アメリカ大陸にはヨーロッパの人々が訪れるようになった。鉄器やウマなど、もともとアメリカには存在しなかったものが伝えられる一方で、ヨーロッパの人々がもちこんだ伝染病により、アメリカ大陸の先住民は激減した。アメリカ大陸からはジャガイモやトウモロコシなどの農作物が世界に伝えられた。また、ヨーロッパの人々はアフリカから奴隷として多くの黒人をアメリカ大陸に連れてきて、銀山などで働かせた。

アステカ王国は 1521 年に、インカ帝国は 33 年にいずれもスペイン人によって滅ぼされ、その後、アメリカ大陸の大部分はヨーロッパの植民地となっていった。

写真：マヤの天文台

インカ帝国の都クスコ

図絵：アステカ王国の繁栄

キープ（結縄）

山川出版社では、現行の「世界史 B」の教科書でも誤りを修正しないままの記述がある。新科目「世界史探究」の教科書でも、従来の記述を見直さずにそのまま使ってくる可能性があり、今後も注視すべきだろう。

第一学習社

『歴史総合』の巻頭特集の一部に、チチェン・イツァのククルカン神殿の写真と簡単な記述が見られる。

- 高原(むしろ低地に著名な都市遺跡がある)で農耕文化、都市文明を形成
- ユーラシア大陸と交流せず独自に発達
- 鉄器・車輪使用せず。牛・馬などの大型家畜なし。

清水書院と明成社の教科書には、いずれも古代アメリカに関する記述は見られなかった。だがこれまで見てきたように、非常に限られた紙面の中で「近代化」とは関連が薄い古代アメリカの記述があることは、一定の評価ができると個人的には考えている。以前、学術情報の普及に関わる戦略ワーキンググループが指摘したように、もっと内容を豊富にすべきだという見方があるかもしれないが¹、「歴史総合」としてはやむを得ない状況だと思われる。

学習指導要領では、地理歴史科の目標として、「調査や諸資料からの情報を調べまとめる技能」「事象の意味や意義、特色や関連を考察」「社

会に見られる課題の解決に向けて構想」「考察、構想したことを効果的に説明、議論」「課題を主体的に解決」といった能力や姿勢をつけることを掲げている。教科書の記述を詳しく正確にするという視点だけでなく、古代アメリカ文明を題材に「何を」「どのように」学んでいくかという視点が、今後の授業には求められている。具体的にどのように「歴史総合」の授業を進めるべきかについては、来年度に教科書「世界史探究」が出た時点で、あらためて考えてみたい。

謝辞

「歴史総合」の教科書作成にかかわった者として、「高等学校教育のための授業案作成ワーキンググループ」を代表して寄稿いたしました。来年度に見本本が届く予定の「世界史探究」の記述内容も整理して公開した後、寄稿内容をたたき台として検討していただければ幸いです。会員の皆様には、引き続きご指導賜りますようお願い申し上げます。

¹ 青山和夫、多々良穰、坂井正人、井上幸孝、吉田栄人 2010年「先コロンブス期アメリカ大陸史に関わる世界史教科書問題」『古代アメリカ』第13号、pp. 31-39.

● *Maya Kingship. Rupture and Transformation from Classic to Postclassic Times*

(Tsubasa Okoshi, Arlen F. Chase, Philippe Nondédéo, and M. Charlotte Arnauld (eds.),
University Press of Florida, 2021 年 3 月, 90 米ドル)

大越 翼 (京都外国語大学)

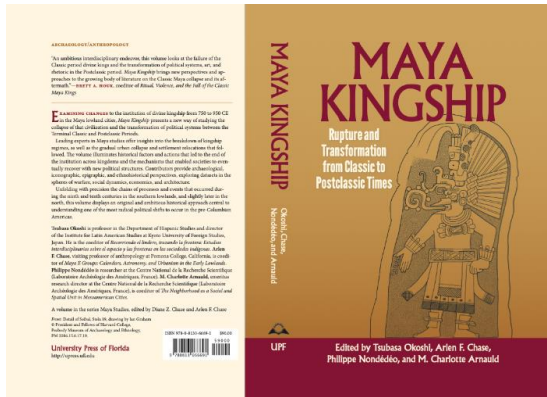


写真 1 表紙と裏表紙

よく知られているように、紀元後 760 年から 810 年の間に、古典期マヤの都市の 4 分の 1 が突然その王朝を失った。宮殿は放棄され、石碑は建立されなくなり、長期暦による日付を記した碑文も刻まれなくなったのである。しかし、これは都市が直ちに放棄されたことを意味したのではなかった。壮麗な建造物が作られなくなり、住民は徐々に他の場所へ移動していき、都市が熱帯降雨林に覆われていった場合もあったのである。一方、他の多くの都市では、王朝が突然途絶え、都市が放棄されていた。ごく少数の都市がこれを生き延びたが、950 年ごろまでにはほとんどのマヤ地域において都市が放棄され、一部の人々は、湖や池の周り、川のそば、海岸、あるいはユカタン半島内陸部に居を移していった。

古典期終末から後古典期初頭に至る約 200 年間に起こったこのマヤ社会の崩壊の原因については、これまで多くの研究がなされ、単一の要因によるものではなく複合的なものによるのであり、また地域によってもその様相が異なることも明らかになってきている。しかし、これらの仮説は紀元後 1000 年以前に関する信頼の置ける年代資料に裏打ちされておらず、土器編年

のみに基づいた考察には問題があることも指摘されている。

そのような中であって、本書はこの「政治的な『崩壊』の性質」に焦点を当てるものだ。「崩壊」は古典期マヤの神聖王、そしておそらく王制そのものにも関わるものであり、すべての政治体制がこの運命を辿ったのではないはずだ。議論の発端となったのは、2016 年メキシコ、ユカタン州イサマル市で開催された第 10 回国際マヤ学会議で行われたシンポジウムであった。半日かけて行われたセッションの中で、王や貴族がこの出来事の中で果たした役割を一連の歴史的背景の中で再考する必要性が明確になった。そこで翌年、京都外国語大学創立 70 周年記念国際シンポジウム「古典期から後古典期への移行過程におけるマヤ王権：断絶か変容か (“Rupture or Transformation of Maya Kingship? From Classic to Postclassic Times”）」が企画・開催され、前近代社会において世界の各地で「神聖王」体制が辿った運命の一つの例として、古典期マヤ社会の「崩壊」を考えることができる可能性が示唆され、この人類学的モデルを古典期から後古典期への歴史の流れの中で再検証することの重要性が再確認された。本書は、したがってこの時期のマヤ社会の内部における政治的変化の過程に焦点を当てるものであり、具体的には歴代の王や宮廷貴族たち、そして平民がどのような行動をとったのかを明らかにするものである。

全部で 19 本の論文を収める本書の特徴の一つは、考古学、碑文学、図像学、そして歴史人類学 (エスノヒストリー) にまたがる学際的アプローチをしていることである。これは、今世紀に入ってから学問の世界で当たり前ようになってきている潮流を示しており、国際的かつ学際的研究こそが、複雑な研究対象の細部を余

すことなく捉えることを可能にするからである。そしてもう一つの重要な特徴は、シンポジウムおよび本書に加わった研究者たちの出自がアメリカ、メキシコ、グアテマラ、フランス、デンマーク、ドイツ、スペイン、ポーランドと極めて多彩であることだ。本書の「はじめに」の役割を担っている第1章に書かれているように、この多様性はマヤ王権研究の認識の仕方そのものにも反映しているはずである。ヨーロッパのように、歴史的に長期にわたって「王」が統治してきた、日本に関していえば現在もなお「天皇」をいだいている社会を背景にする研究者と、そうではない国々の研究者との間には、当然認識にズレが生じるはずだ。その「ズレ」こそが、これからマヤ社会の特質の議論と理解に極めて重要な意味を持つてくることに期待したい。

1967年に刊行された『マヤ文明—世界史に残る謎—』（中公新書）のなかで、故石田英一郎先生は「日本のことだから、いずれはマヤの専門家が出てきて、この種の本も彼らの手で書かれるようになるだろう」と述べておられる。それから半世紀を経て、これは現実のものとなっている。そればかりか、海外の研究機関・大学に所属して、第一線で活躍している日本人マヤ研

究者も多いことは誠に喜ばしい。本書では、古代アメリカ学会の青山和夫会員（茨城大学、考古学）、猪俣健会員（アリゾナ大学、考古学）、塚本憲一郎会員（カリフォルニア大学リバーサイド校、考古学）、鈴木真太郎会員（岡山大学、生物考古学）、そして歴史人類学者である私が参加している。それぞれの研究がどのように本書の主テーマに貢献しているかを、ぜひお読みいただきたいと思う。

最後になるが、これほど著名な多数のマヤ研究者が集まって会議をし、その成果が米国から出版されるのは日本ではこれが最初であろう。19本という多数の論文を集めて編集する作業は並大抵なものではなかった。とりわけ参考文献リストをまとめて巻末に置くことになり、1,200点以上の項目を全てチェックし、記載に誤りがないようにするために、大学院生の助けを借りて毎日遅くまで研究室に残って仕事をした日々を今懐かしく思い出している。共同編集者であるアルレン、シャルロット、フィリップ達との細かいやり取りや作業も、本書の完成には不可欠であった。素晴らしいチームワークであったし、彼らと仕事ができたことを誇りに思う。

● 『メソアメリカ文明ゼミナール』

（監修：伊藤伸幸、編集：村上達也・嘉幡茂、勉誠出版、2021年1月刊、5000円＋税）

伊藤 伸幸（名古屋大学）



写真1 表紙と裏表紙

本の概要

本書の主題はアメリカ大陸に興ったメソアメリカ文明の歴史である。この文明に関する基礎的な知識だけでなく、より深い知識や知見を

獲得し、さらに現在の学界動向が学べる概説書を目指した。

主に考古学研究に基づき、メソアメリカの歴史を理解するために三部構成となっている。

第一部は「古代メソアメリカ文明の出現背景」で、人類（ホモ・サピエンス）のユーラシア大陸からアメリカ大陸への移動、そしてメソアメリカ文明の成立以前までを扱っている。この文明がなぜそしてどのように出現するに至ったのかを理解するために、人類がアメリカ大陸に登場し各地域へと拡散していった過程、及びパレオインディアンの初期文化について概観する。その後、狩猟採集社会から定住社会へと移るメソアメリカ地域の初期文化について解説す

る。最後に、メソアメリカ文明とはどのように定義付けられるべきなのか、そしてその地理的範囲はどこまでを指すのかについて議論する。

第二部「古代メソアメリカの歴史」では、この文明の萌芽からスペイン人による古代文明の崩壊までをテーマにする。古代メソアメリカ地域は、地理的多様性から各地域で独自の文化が開花したが、文明の崩壊まで1つの政体によって統一されることはなかった。一方で、各地域社会は複雑な交流網を確立し、イデオロギーを共有することで、1つのまとまった文明として発展した。旧大陸の文明にはない独特な社会発展史を考慮し、各章は地域で分けて、その中で社会変遷史を通時的に見ていく。

既存の概説書では、巨大なピラミッド神殿群や王朝史など社会の上層部と関連する記述に偏りがちであった。古代メソアメリカ社会の全容を見るために、本書では可能な限り一般の人びとの生活にも焦点を合わせている。各章では執筆者の発掘調査・研究を含めて最新の成果を基にして記述すると共に、衣食住に関する情報を多く取り入れ、古代社会の各様相について解説している。

第三部「メソアメリカ考古学と隣接科学」では、メソアメリカ文明史の復元に必要不可欠である近隣科学について詳述している。古代メソアメリカでは文字資料が極端に乏しいため、形質人類学、文化人類学、碑文学、絵文書学などを専門とする研究者と共同で古代史の解明に取り組んでいる。一方、メキシコ・中米諸国の政府は、積極的に文化遺産を一般公開する戦略を取っている。そのため、修復保存、博物館学、パブリック・アーケオロジーの研究も盛んである。また、自然科学で発展した分析技術を考古学に応用することも多くなっている。そして、当時の生活史の復元に向けて、出土した動植物遺存体に関する知識や研究の成果も必要とされている。メソアメリカ文明の実像により広く、そして深く接近する目的を持つ本書では、これらの隣接科学も扱っている。最新の研究方法とその成果を読者に提供できると考えている。

一方、コラムは各章で登場する遺跡や話題と関連しており、該当する章について読者の深い理解が得られるように挿入した。さらに、多数の図版や写真を挿入し、わかりやすい概説書を

目指した。

本の構成

はじめに

古代メソアメリカ遺跡分布地図

第一部 古代メソアメリカ文明の出現背景

第一章 氷期にさかのぼる最初のアメリカ人の出現とその拡散

第二章 狩猟採集社会から定住社会へ

第三章 古代メソアメリカ文明とは何か

コラム①冶金術

第二部 古代メソアメリカの歴史

第一章 メキシコ湾岸文化—南部地方と中部地方の古代文化

コラム②ラ・ベンタ、③エステロ・ラボン、④エル・タヒン、⑤カントナ、⑥コマルカルコ、⑦テオパンテクアニトラン

第二章 メキシコ中央高原文化—テオティワカンからトルテカ

コラム⑧クイクイルコ、⑨トラランカレカ、⑩チョルーラ、⑪ソチカルコ、⑫カカシュトラ・ショチテカトル

第三章 アステカ文化

コラム⑬貢納台帳、⑭テンプロ・マヨール、⑮市場（ティアンギス）

第四章 マヤ文化—先古典期と古典期

コラム⑯ティカル、⑰パレンケ、⑱コパン、⑲チチェン・イツァ

第五章 後古典期マヤ文化

コラム⑳ウシュマル

第六章 南東部太平洋側文化

コラム㉑タカリク・アバフ、㉒チャルチュアパ、㉓カミナルフユ、㉔火山灰編年学、㉕ホヤ・デ・セレン

第七章 オアハカ文化—サポテカとミシュテカ

コラム㉖モンテ・アルバン、㉗サン・ホセ・モゴータ、㉘ミトラ

第八章 メキシコ西部文化

コラム㉙ワチモンソン、㉚ラ・ケマダ、㉛ツィンツァン

第九章 メキシコ北西部文化

コラム㉜カサス・グランデス（パキメ）

第十章 中央アメリカ文化

第三部 メソアメリカ考古学と隣接科学

第一章 形質人類学

コラム㉝同位体分析による古食性推定、㉞DNA分析

- 第二章 民族学・文化人類学
- 第三章 歴史学
- 第四章 碑文学
- 第五章 絵文書学
- 第六章 保存修復科学
- 第七章 博物館学とパブリック考古学
- 第八章 考古科学
- 第九章 動植物学

コラム③⑤貝塚、③⑥漁撈、③⑦カカオ

おわりに

メソアメリカ文明年表

索引

執筆者紹介

本の見どころや思いを込めたところ

伊藤が古代メソアメリカ文明を学び始めた1980年代後半、この文明に関する英語やスペイン語の概説書はあったが、日本語の教科書は乏しかった。そのために、外国語を不得意とする学生には、この文明に関する情報を得る手段に限られていた。

それから、30年以上が経った今、日本人研究者研究者の数も増え、国際学会でも注目すべき調査や研究が多く見られるようになった。そし

て、日本人の若手研究者は、メソアメリカ各地で学術調査を実施し、その研究成果が欧米で認められることも多くなってきた。また、日本人によるメソアメリカ研究も、マヤ地域やメキシコ中央高原のみでなく、メソアメリカ全域にわたっている。その結果として、日本人研究者による概説書も出版されるようになった。

しかし、それぞれの研究者が専門とするメソアメリカの1地域がより詳細に述べられ、他の地域は大略しか記述されていない本もある。そこで、メソアメリカの各分野で業績を上げている若手研究者や、将来を期待される研究者を選び、各自が専門とする地域や分野について日本語で詳細に記述することを依頼した。また、調査・研究の成果を本書に取り込んだ。

読者へのコメント

メソアメリカ文明に関する基礎的な知識だけでなくより深い知識や知見を獲得し、さらに現在の学界動向が学べる概説書を出版することを考えた。本書が、メソアメリカ文明の研究を志望する大学生や、興味をお持ちの方々にとっての教科書になれば幸甚である。

● 『ラテンアメリカ文化事典』

(ラテンアメリカ文化事典編集委員会編、丸善出版、2021年1月刊、20000円＋税)

関 雄二 (国立民族学博物館)

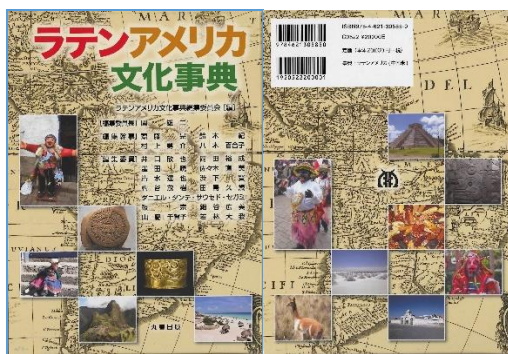


写真1 表紙と裏表紙

ラテンアメリカは広大である。地球の陸地の12%を占める南米大陸に、中米、そして北米の一部であるメキシコを加えた空間がどれだけ広いかは、すぐには想像しがたい。そして、ラテ

ンアメリカは、世界史のターニングポイントの一つでもある大航海時代を象徴する場所でもある。

クリストバル・コロンによるカリブやアメリカ大陸の「発見」は、長らく自らの世界に閉じこもってきた西欧社会にとって、大いなる思想の転換を呼び起こしたし、また「発見」された人々にとっては、未知なる文化との交渉の開始でもあった。不幸な結果に終わることが多かったが。

征服の指揮をとったスペインは、遭遇した先住民を同じ人間として扱うべきか、人類史上初めての問いに対する答えを模索し、真剣に議論を闘わせた。他方、マヤ、アステカ、インカの諸文化は、後世において「文明」や「帝国」という言葉が冠せられるほど、西欧社会からは敬

意を示された。いずれにせよ、人類史上、これほど規模が大きく、また巨大な空間を舞台にした異文化接触はなかったといってもよい。

しかしそのラテンアメリカも、すぐに接触から抑圧の場へと変わり、多くの先住民は死の淵に追いやられる。こうして始まる植民地時代は、その後 300 年以上も続き、この過程で、先住民のみならず植民者でさえも、異文化を自らの文化と対比させながら、自らの文化に取り込み、消化することを繰り返し行ってきた。抑圧下での主体的なこの行為は、やがてスペインを筆頭とする宗主国との差別化をもたらすことになり、独立運動へと向かい、その後も、この種の統合と分裂は果てしなく続いていく。

こうした背景から生まれたラテンアメリカ文化が、地域的にも、時代的にも多様であることはいまでもない。また、言語論的転回を経験した今日の人文社会科学分野では、対象を描く立場の相対化が求められるという学問の事情も忘れてはならない。変化を嫌う研究者の立場から伝統社会を静態的に描くことの傲慢さは、対象社会の権利に対する侵害として近年糾弾されつつある。

一方で、その西欧的な伝統社会像を巧みに操り、観光資源化していく先住民の逞しい生き様もあり、現状を描く研究者の作業は決して容易ではない。さらに、歴史学の分野においても、依拠すべき記録文書は、その成立過程を振り返りながら、文書作成者の置かれた立場、文書を公刊した意味にまで踏み込んで分析するという、いわゆるテキスト・クリティクなしでは扱わづらなくなっている点も押さえておかななくてはならない。

いずれにしても、そうした錯綜する社会と学問の状態を押さえながら、たった 1 冊の本でラテンアメリカ全体を描こうとするのは無茶とさえ無茶であろう。実際に本書では、日本において研究があまり行われてこなかった地域や国に関する情報が手薄になった点は否めない。しかし、私たち 19 名の編者が目指したのは、データベース的な百科全書ではない。むしろ自らの専門領域の現場から、絡まった糸をほぐし、より大きなテーマや現象につなげていくという作業であった。いいかえれば、この事典は、ラテンアメリカの現在と過去を、いくつかの切り

口から描いたものであると同時に、日本におけるラテンアメリカの文化研究がどこを焦点に絞って展開してきたかを浮かび上がらせる役割も担っているのである。

そのようなことを頭の片隅に置きながら、ラテンアメリカ文化のおもしろさ、奥深さを感じていただければ幸いである。最後に全 17 章において扱ったテーマ、ならびに編集委員会メンバーをあげておく。1 項目見開き 2 ページの構成は、どこからでも読み始めることができる事典ならではの楽しさを感じることができるのではないだろうか。高額な本ではあるが、ページをめくれば、ラテンアメリカの香りがぷんぷんと臭ってくることは間違いない。

カラー口絵

- 1 序論 ラテンアメリカとは
- 2 文明・文化遺産
- 3 歴史
- 4 民族
- 5 移動する人々と現代ラテンアメリカ文化
- 6 生業
- 7 食と嗜好品
- 8 観光
- 9 宗教
- 10 言語とコミュニケーション
- 11 美術
- 12 音楽・映画
- 13 文学・思想
- 14 スポーツ
- 15 政治
- 16 経済
- 17 ラテンアメリカと日本

付録 1：各国情報

付録 2：年表

ラテンアメリカ文化事典編集委員会

編集委員長 関雄二

編集幹事 齋藤晃、村上勇介、
鈴木紀、八木百合子

編集委員 井口欣也 岡田裕成
窪田暁 佐々木直美
清水達也 渋下賢
杓谷茂樹 田島久歳

Daniel Dante Saucedo Segami

鼓宗 細谷広美

山脇千賀子 若林大我

● 『古代マヤ文明—栄華と衰亡の3000年』

(鈴木真太郎、中央公論新社、2020年12月、960円+税)

鈴木 真太郎 (岡山大学文明動態学研究所)

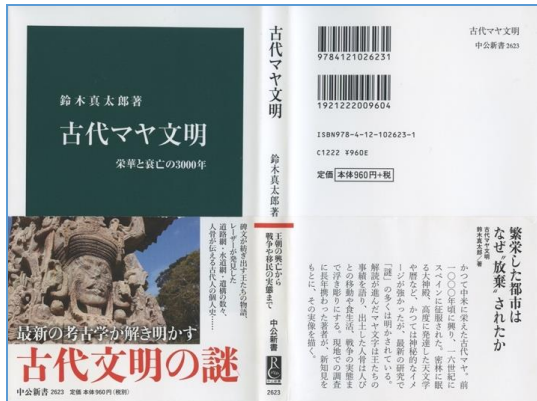


写真1 表紙と裏表紙

本書の目的はまずもって古代マヤ文明圏における考古学骨研究を紹介することである。もちろん今日では日本国内でも多くの良書、大著が出版されており、筆者が古代マヤに興味を持ち始めた90年代の半ば頃にはほとんど不可能だった「世界標準のマヤ考古学を日本語で学ぶ」ということも可能になってきていると思う。昭和生まれとしてはなんとも羨ましい限りだが、ただ一方でこうした「日本語を介して紹介されている」、「日本語で学ぶことのできる」マヤ考古学の内実には一定の偏りがあることもまた事実ではないかと思う。非常に詳しい分野がある一方で、そうでない分野も確かに存在し、この「日本語ではまだ若干学びにくいマヤ考古学の側面」のきわめて重要なひとつが、考古学骨の研究なのである。

少なくとも筆者はそう考えていた。現地での研究に軸足を置きつつも少しずつ日本での研究発表の機会を与えられていた2016年頃である。「考古学骨の研究は自身が長年現地で専門としてきた領域であり、自身の研究成果も含めれば、ある程度のレベルの内容を紹介することができる。そうすれば、日本語で学べるマヤ考古学の幅を少しだけとはいえ広げることができるのではないか」そんな風に考えていたのである。

そんな矢先で出会ったのが中央公論新社の大恩人、吉田亮子氏である。サントリー文化財団が行っている「若手研究者のためのチャレン

ジ研究助成」の研究成果を報告する中間報告会の席であった。同会では助成金を受けた若手研究者が財団で審査に関わられた先生方を前に研究成果の見通しを発表するのだが、この会は同時に若手研究者がさまざまな出版社、新聞社、メディアの皆様と知り合うきわめて貴重な機会なのである。大学を卒業してからずっと現地で研究をしてきた筆者にとっては、まさに願ってもない僥倖、渡りに大型クルーザーがやってきたようなものであった。

一方で伝統ある中公新書でマヤ文明に関する本を書くというのは、まさしく恐怖でもあった。何を隠そう、筆者が初めて読んだマヤ本も石田英一郎先生の中公新書『マヤ文明』である。その後、50年以上の時間が経って、中公新書のマヤ概説的なものをアップデートする。そんなことを筆者のように現地で細々と仕事をしてきたミノムシがやってもいいのだろうか。「嬉しい」と同時に、とにかく「やばい、怖い」と打ち震えたものである。しかも、皆さん気づかれた方が多いかもしれないが、内容が単純な考古学骨研究紹介ではなくなってしまっている！！吉田さんとメールでのやりとりを重ね、企画を練り続けていくうち「やはりここは考古学骨の研究を紹介するとともに、マヤ文明の概略も理解できるようなものに」となってしまったのである。

執筆はまだ現地のグアテマラ、デルバジェ大学に勤めていた頃から少しずつ始めた。まずは身の回りであった「現地のこぼれ話」的なエピソードを拾い集めようと思ったのである。コラム2「拡大する首都グアテマラシティー、失われる古代遺跡」で紹介したレスキュー発掘をめぐる逸話や、第4章「グアテマラ高地、マヤ王国の終焉」で触れた英雄テクン・ウマンの話などは、この頃に着想を得た部分である。貧乏をしながらもなんとか現地で生き繋いでいると、色々と面白い話も聞くことができるものである。これらの逸話は王道の教科書や概説書にはない本書の特徴になったのではないかと考えている。

その後は本書の実際の構成とはほとんど関係なく、章単位で、序章「マヤ文明研究の歴史」、第4章、第2章「南部周縁地」、第6章「ペテン地方」と執筆を進めていった。

序章と第4章は現地在住の利点を生かしながら、現地のグアテマラ人民族歴史学の専門家を頼りながら書き上げ、ようやく南部周縁地で自身が研究をしてきたコパン周辺の話に触れながらも、やはりコツマルワパのあたりでは現地の専門家にオンブニダッコになりながらなんとか原稿を完成させた。

ユカタン半島は自身が修士の研究を行いながら、その後の助手時代を含め7年近く暮らした場所である。様々な概説書にあたりながらも、自身の経験やユカタン自治大学における講義の記憶やノートを紐解きながら書き進めた。

そして、第6章は難敵、苦手な碑文を中心とした栄枯盛衰の王国物語である。そもそも碑文に書かれている内容はそのまま歴史物語ではなく、抽象的で、それ自体が大いに解釈の余地を含むものである。しかし、「マヤ神聖文字の碑文解読から得られた王国の栄枯盛衰」はおそらく一般の人々にとってはもっとも興味深く、また面白いところだろう。なんとかうまくまとめなければ、無理だよ。なんども匙を投げそうになりながらも、長年の友人である新進気鋭の碑文学者 Felix Kupprat 氏の温かい援助を受け、R. Sharer による概説書、N. Grube & S. Martin による解釈書などをひっくり返しながらか、なんとか面白くてわかりやすい（と、筆者は思っている）歴史物語を整えた。

さて、ここからが本書の肝である。概説部分をなんとか書き上げたので、いよいよ考古人骨研究編に突入である。この頃にはすでに現在の勤務先に異動してきており、もはや現地のツテを気軽に頼ることはできない。ただ、ここからは自身が専門分野とする部分である。おそらくは、それほど苦労もなく、書けるのではないだろうか。毎度お馴染みの甘い見通しである。

確かに、第1章「考古学と形質人類学」、第3章「人は動く」、第5章「古代の食卓」、第7章「古代マヤにおける戦争」、第9章「肉体は文化を語る」は、自身の研究や経験を中心にとっても楽しく書き上げることができた。「なんとか書き上げた」という概説ではなく、自分が今まで

人生を賭けて専門として扱ってきた内容を、読んでくれる多くの読者を想像しながら書くというのは、とても楽しい。楽しすぎるのである。どんどんとページ数は膨らんでいき、当初「12万字くらいで」と言われた原稿は、考古人骨研究編を追加した段階で、なんと18万字を超えていたのである。

ここからは涙の圧縮作業である。量を削減するという強い意志で読み返していくと、やはり冗長な部分があったり、あまり意味のない繰り返しがあったり、なかなか良い文章のブラッシュアップにはなつた。しかし、ノリノリで書いた文章を削るというのはどうしても悲しいものである。削り取られた文章たちよ、いつか日の目を見せてあげることができればと思う。

本書執筆中にあったもう一つの大きな山場を紹介すると、それは章立て構成の変更である。当初の予定では概説部分と考古人骨部分を第1部、第2部のようにはっきりと分けることを考えていたのだが、執筆の途中で「この地域のことわかって、それからこの考古人骨の研究」という流れに沿って読み進めることができるよう、現行のような概説部分と人骨部分が交互に来る構成に変更したのである。これがなんとも大蛇を入れるが如くの変更で、なかなか難しくかなり苦労をしたのだが、果たしてうまくいったのかどうか。評価は本書を手にとってくれた読者諸賢にお任せしたいと思う。

さて、最後になるが、実際に本書が出版されてから、早くも半年が経過してしまった。日々の業務をこなしながら、次から次へと舞い込んでくる諸々の原稿を右から左へやっつけていくうち、あれだけ精魂注いだ本書もすでに「過ぎ去りし過去のもの」のような感覚になりつつある。しかし、「ああ、頑張って書いたなー」と感慨に耽りながら、なんとなくパラパラとページをめくっていると、そこには信じられないような誤字が！なんども読み返して徹底的にチェックしたはずなのに、なぜ！？悔やみきれない部分ではあるが、いつか版を重ねる機会があればできる限り修正を行いたいと思う。それまでは是非、本稿で記した菲才の若輩がなにかの巡り合わせで大変な機会を与えられてしまった紆余曲折に笑いながら、寛大な心で、本書を楽しんでいただければ何よりの幸いである。

●第10回西日本／第12回東日本部会合同研究懇談会 『記憶をめぐる言説の通時の研究：先スペイン期アンデスと植民地時代ユカタン総督領の事例から』

研究懇談会のテーマや日時や参加者は、中米と南米のバランス、非会員の招待などを考慮して研究担当役員と東西幹事が決定する。2020年度はさらに、東西の開催回数の差を減ずるべく、西で2回、東で1回との予定で調整していた。しかし西日本で2月に第9回を開催したあと、東日本で3月に計画していた会は新型コロナウイルスの蔓延によって開催できなくなった。西日本で第10回のテーマ「(モニュメント建築と文書の)記憶」は、東西の担当者間で2019年度から温めていたものである。オンライン開催なら西と東に無理に分ける必要はない。かくして本会は合同企画として、発表者でもある西日本幹事の大越翼会員(京都外国語大学)が参加者との調整など準備を進め、東日本幹事である筆者が司会進行を務めた。2020年度研究大会のオンライン開催のリハーサルを兼ねて、ホスト校であった金沢大学がメインホストを務めた。開催日時は11月15日(日)14:00-17:40で、会員33名、非会員6名が参加した。

最初の発表は松本剛会員(山形大学)による「儀礼実践の通時的観察によって明らかになる祖先の記憶の変化」であった。まず人類学における生・死・祖先の論点が整理された。記憶を鍵として、遠い昔に死亡した第一原理祖先と、イエに関連して名前の残る新興イエ祖先とが区別される。古代アンデスに関して民族歴史学・民族誌からこの点が分析されてきたが、考古データに即した具体的な解明が遅れている。そこでペルー北部海岸のシカン遺跡において、ランバイエケ政体(A.D.950-1100)の政治的求心力の源であったと考えられる祖先崇拜の実態を、発掘データから復元したのが本研究である。季節性を帯びた祖先崇拜の儀礼が400年以上の長きにわたり反復され、死者との共食儀礼が行われたことが示唆された。またピラミッドが風雨に浸食されるに伴い、山のイメージが喚起され、その周辺に人身供犠や埋納が行われるようになる過程が示された。

コメンテーターとして会外より招待した北條芳隆氏(東海大学文学部教授／日本考古学)から、東アジアと比較する視座が提示された。アンデスにおける山と死者の信仰と対比される事例として、古代中国の山中他界観の影響のもと、日本の弥生時代後期から古墳時代にかけて墓域とされたさまざまな山の事例が紹介された。また天体運航とシカン遺跡の建築設計の対応、暦との関係について仮説が提示された。

2本目の発表は大越会員による「『記憶』(過去)と『いま、ここに』(現在)が出会う時：『土地権原証書』の使用をめぐる一考察」であった。植民地時代のマヤ文書はスペイン語の文書と同じ書式であるが、修辭学的な特徴を分析すると、読み方を示すためにハイフン等の記号が用いられているなど、読み聞かせを意図して書かれている、という仮説がまず提示された。ユカタン半島で16世紀に作成された「土地権原証書」は、村の間の領地争いを解決するために19世紀初頭までに何度も裁判所に証拠書類として提出された。それぞれの村の権原証書は音読され、聞き手の五感を通じて「記憶(過去)」が出現し、「いま、ここに(現在)」を正当化するものであった。「いま」の要請に従って「過去」が改変されることもあり、「いま」の成り立ちを説明する新しい「聖なる書物」として人びとに信頼されていたのである。

コメンテーターの小林貴徳会員(専修大学)は、現代のゲレロ州の先住民の領土問題において、植民地期資料が果たした役割を紹介した。農地区の境界が描かれた絵布は村の祭壇に掲示され、そこで職能者や参加者が儀礼を行い、また境界領域に設けられた聖所への巡拝なども実施される。このような境界実践は現代においても、コミュニティの土地と歴史の正当性を再認識させる重要な契機になっていることが指摘された。

(東日本研究部会幹事 鶴見英成)

●天理大学附属天理参考館第86回企画展「器にみるアンデス世界—ペルー北部地域編」

荒田 恵（天理大学附属天理参考館）

本展は、天理大学附属天理参考館3階企画展示室にて2021年4月14日より6月14日まで開催した展覧会である。天理大学附属天理参考館が主催し、「令和2年度・3年度公募型メディア展示」事業の支援による国立民族学博物館の特別協力、天理市、天理市教育委員会、古代アメリカ学会、歴史街道推進協議会の後援をいただいた。

本展では、ペルー北部地域を対象として土器資料とその贗作を展示することで、当時の世界観に触れてもらい、それらが現代ペルー社会において古代とは異なる脈絡で再生産されている様子を紹介した。そして、商業目的の贗作づくりと対比させるために国立民族学博物館よりチュルカナスのやきものを借用して展示し、古代アンデス土器の製作技術を現代に復興させた民衆芸術があることを示した。当初は開幕より、「令和2年度・3年度国立民族学博物館公募型メディア展示」事業の支援により制作した、タブレット端末およびVRゴーグルで笛吹ボトルの内部構造を閲覧する体験型のメディアコンテンツを提供する予定であった。しかし、開幕直前の社会情勢を鑑みて、接触型であるコンテンツの公開を見合わせるようになった。その後、会期中盤の5月中旬頃より奈良県内の新型コロナウイルスの感染者数が減少傾向に転じたことから、5月25日より閉幕まで、感染予防対策を講じて企画展示室にてタブレット端末を公開した。さらに6月9日より閉幕まで、来館者の中から希望者を対象としてVRゴーグル体験を実施した。同様に感染予防対策を講じ、参加人数は合計35名であった。

一方、関連イベントである講演会については、規模を縮小するなど感染予防対策を講じて日程通りに実施した。4月24日（土）に実施したトーク・サンコーカン「X線CT

画像から分かる古代アンデス土器の“贗作”づくり」では筆者が講師を務め、国立民族学博物館共同利用型科学分析室の協力を得て撮影した館蔵資料のX線CT画像をもとに、補修の痕跡や贗作として断定した根拠を解説した。5月8日（土）には、国立民族学博物館副館長の關雄二会員を講師に招いて「アンデス文明の大神殿を掘る—黄金の発見と文化遺産の活用—」と題した記念講演会を開催した。現地調査のエピソードを交えながら、これまでの日本調査団の研究の歩みと、並行して実施されている遺跡の保存活動についてご講演いただき、参加者は終始うなずきながら興味深く耳を傾けていた。そして関連イベントの締め括りとして、5月21日（金）に当館の梅谷昭範学芸員によるトーク・サンコーカン「アンデスとメキシコの古代文明を比べてみよう」を実施した。アンデスとメキシコの館蔵資料を紹介しながら、テーマ別に両地域の比較を行った。なお各講演会の参加人数は、それぞれ24名、27名、25名であった。

会期中の来館者数は1,297名と伸び悩んだ一方で、見応えがあった、あるいは初めての試みが見られた興味深い企画であったなどのコメントが多数寄せられ、好評のうちに終えることができた。



(天理大学附属天理参考館3階企画展示室)

事務局からのお知らせ

1. 第 26 回研究大会・総会の開催について

COVID-19 への感染予防の観点から、7 月 28 日（水）に開催された役員会において、古代アメリカ学会第 26 回研究大会・総会は、2021 年 12 月 4 日（土）と 12 月 5 日（日）の 2 日間にわたってオンライン（本部：法政大学）で開催することに決定いたしました。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

本学会では研究発表について審査制をとっていません。発表を申請される会員は、研究大会実行委員長による別紙「第 26 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について」をご参照の上、研究発表の申請をしていただきますようお願いいたします。

なお、研究大会、総会のご出欠については、メールにてお知らせした URL から 2021 年 9 月 30 日（木）までにご回答ください（締切厳守）。総会にご欠席の方も、同じ URL から委任状を提出いただけますのでご協力をお願いいたします。

記

古代アメリカ学会第 26 回研究大会・総会

(1) 日時：

一日目 2021 年 12 月 4 日（土）

研究大会 13:00～17:00（予定）

総会 17:00～18:00（予定）

二日目 2021 年 12 月 5 日（日）

研究大会 09:00～12:00（予定）

（発表本数が多い場合は午後の部も行います）

(2) オンライン開催（本部：法政大学）

この件につきましてご不明の点がございましたら、事務局（info@americaantigua.org）までお問い合わせ下さい。

2. 第 26 回研究大会における研究発表等の申請方法と審査について

古代アメリカ学会第 26 回研究大会実行委員長
芝田 幸一郎

会員より申請があった研究発表等については、研究大会実行委員会が審査をおこなったうえで発表許可の可否について通知いたします。

発表を申請される会員は、以下の要領にしたがって申請をして下さい。

記

以下の事項を記入し、PDF ファイル（またはワードファイル）にて事務局に添付ファイルでお送り下さい。

1. 発表申請者（会員に限ります）
2. 発表申請者住所・E-mail（発表申請者に対して審査結果をメールで通知します）
3. 発表カテゴリ（研究発表、調査速報、ポスターセッションのいずれか）
4. 発表タイトル
5. 発表著者（共同発表の場合、研究大会抄録、プログラム等に記載する順番通りに記入してください）
6. 口頭発表者（実際に口頭発表をおこなう者。会員に限ります）
7. 発表要旨（研究発表：1200 字程度、調査速報：800 字程度、ポスターセッション：800 字程度。要旨とは別に 1-2 枚の図版等を添付することも可としますが、その場合も要旨のテキストと同じファイルの中に組み込み、一つのファイルにして送付してください）A4 判にて、1 ページ 40 字×40 行、横書き、余白は上 35 mm、下・左・右 30mm、文字は 10.5 ポイントで作成してください。
（*発表時間は、質疑応答を含め調査速報 20 分、研究発表 30 分を予定しています。ポスターセッションは質疑応答を含め 15 分程度を予定しています）

*送付先：info@americaantigua.org（学会事務局）

*締切：2021 年 9 月 30 日（木）午前 10 時（メール必着）

古代アメリカ学会では、会員が共有する関心テーマについて集中的に議論できる場を提供するため、第 20 回研究大会より分科会枠を導入しています。分科会は、特定の研究テーマに即して、代表者を含めて 3-5 名のグループで発表・討論する場です。分科会に割り当てる時間は、口頭発表者数×20 分を予定しています。この時間をどのように使うかは、分

科会ごとに判断してください。口頭発表の時間を削ってコメンテーターを導入したり、討論の時間を増やすことも可能です。なお分科会は、通常の研究発表・調査速報と同じ会場で実施され、発表時間が重なることはありません。ただし口頭発表できる機会は、研究発表・調査速報・分科会発表をあわせて一人1回です。分科会はコメンテーターを指名することができますが、それは口頭発表として数えません。分科会を組織する方は、分科会のタイトル、発表者（変更不可）、趣旨説明（1200字程度）、全発表者の要旨（各800字程度）を取りまとめて、代表者として申請してください。送付先・締切は他の発表と同じです（上記をご覧ください）。なお分科会代表者・発表者は、オンライン出欠確認フォームで「発表申請」の「有」を選択して下さい。

審査結果については、10月15日（金）頃までに、申請者にメールで通知いたします。この通知と同時に、発表許諾者にたいしては、抄録要旨の原稿依頼・執筆要領などもお知らせしますので、決められた期日までにご提出をお願いします。

なお、審査基準については、以下の「参考」をご参照下さい。とくに、単独発表か共同発表か、また著者の記載順をどうするかなどについては、あらかじめよくご調整のうえ申請をなさるようお願いいたします。

*参考 「古代アメリカ学会研究大会運営に関する申し合わせ（平成23年12月2日役員会決定）」より抜粋

・発表についての審査は、以下の原則に照らして判断することとする。

（内容）

(1) 研究大会でおこなわれる発表は、現在の一般的研究状況において一定の水準に達していなければならない。

(2) 発表の内容が、他の研究者の著作権やデータに関する権利を侵害してはならない（オンライン開催の場合、著作権には例年以上に配慮を要しますのでご注意ください）。

（形式）

(1)（口頭発表をおこなうことができる者）

口頭発表者（実際に口頭で発表をおこなう者）は会員でなければならない。ただし実行委員会が企画した招待講演・発表等についてはこ

の限りではない。

また、口頭発表者は、会員であれば第2発表者以下でも差し支えない。

(2)（発表者および共同発表者の記載順）

発表者名（単独発表か共同発表か、共同発表の場合発表者記載順など）は、データに関する権利等の観点から適切でなければならない。このため、口頭発表者が会員であれば、非会員は第2発表者以下の共同発表者となることができる。

(3)（複数の口頭発表についての制限）

1回の研究大会において会員が口頭発表をおこなう機会は一人1回とする。ただし、複数の共同発表者（記載順を問わない）となることができる。

以上

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第25号（2022年12月発行予定）に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集します。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、最新の寄稿規定および執筆細目（ウェブサイト掲載）をよくお読みの上、ご投稿ください。

投稿に際しては「投稿エントリーカード」の提出が必要となります（2022年3月31日提出締め切り）。「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。カテゴリーにかかわらず、原稿の提出締め切り日は、2022年5月20日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読（原稿受領後1～2か月程度で終了予定）の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先：

山本睦（運営委員、会誌編集担当）

〒990-8560 山形市小白川町1-4-12

山形大学人文社会科学部

Tel. 

E-mail : aant.edit@gmail.com

②会報「47号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようお願いいたします。

【内容】

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。
会誌『古代アメリカ』には投稿しないような**簡易の情報も可**。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

【形式】

○原稿字数は、写真・図版を含めて4000字（会報2ページ分）以内とします。超える場合は会報担当委員まで事前にご相談ください。

○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

【掲載】

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

【投稿先・締切】

○添付ファイルの形で下記までメールにて送信してください。

お問い合わせ先：

千葉裕太（運営委員、会報編集担当）

E-mail : 
(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 2022年7月15日

○発行予定 2022年8月下旬

4. 会費納入のお願い

会費が未納となっている方は、先にお送りいたしました振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお2年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行 口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

みずほ銀行山形支店

口座番号：1211948(普)

口座名義：古代アメリカ学会

なお、PayPalでのお支払いをご希望の方は、account@americaantigua.orgまでご連絡ください。PayPalご利用の場合、決済は日本円でおこなわれます。年会費に手数料（2021年2月現在：海外決済：4.1%+40円、国内決済：3.6%+40円）を含めた額をお支払いいただくこととなりますので、ご了承ください。

【重要】学生会員の会費納付書への所属機関記入について

本学会では学生会員に会費優遇制度を設けていますが、学生期間終了は速やかに一般会員資格に移行していただくために、今年度より、「払込取扱票」で納入する場合は所定欄に現在の在籍校と学年を明記していただくこととしましたのでご協力をお願いいたします。なお、ネットバンキング等を通じて納入する場合は、振り込み前に事務局へ現在の在籍校と学年をご連絡願います。

【重要】所属機関が会費納入する際の納付書再発行費用について

文部省科学研究費補助金等で会費を納入いただくにあたって会員が所属する機関から納付書を再発行するよう依頼があった場合、その送付にあたっての送料は納付者の負担となります。ご希望される方は、あらかじめ学会事務局までお問い合わせください。

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2,000

円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。これらの号につきましては、著者の許可を得たものから本学会ウェブサイトで開催しております。

6. 2021年度学会費減額措置について

2021年2月8日付でお知らせしましたように、本学会では2021年度学会費について減額措置を設けました。一般会員ならびにシニア会員に対する減額措置申請期間は終了し（2021年6月30日締切）、申請者には役員会での審査結果をお知らせしたところです。万一、まだ審査結果を受けていない方がおられましたら、学会事務局までご連絡ください。

なお、学生会員ならびにジュニア会員には無申請でも減額措置が適用されますので、納入のほどよろしくお願いたします。

〈事務局からのお願い〉

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いいたします。特にGmailなどのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

